

狂

裂

天易真兮くんが銅製の鋏で補強されたセルジュ・ドウ・ニーム（ニームの綾織。いわゆるデニム）の尻ポケットから、『BLUES HARP』※ホーナー社製の単音一〇穴ハーモニカ。木製ボディ、金属製カパー。を抜き、一〇穴のうち二つを窄めた唇で息吹、金属リードを震わせ、即物な音を一秒と少し。

ちよつと耳ざわりで、少しかなしげな、ハーモニカのひびき。をかしくもあり、そこはかとなく懐かしき、乾いた日差し、さらさらとあきらけくすみあけし、秋の寂び。子とありし金属音の、在りさま侘びし。

狂裂。

あたかも、ブリキ ※錫で鍍金した銅の板。の空き缶、蓋があいたままからっぽの、時が止まっているかのように無表情な。存在が炸裂であった。在るという、ただ、それ丈で、狂奔裂である。見境なき自在無礙、解放をも解き放つ狂解放、無際限をも遙かに超えた自由、タブーなく、定義なく、かたちなく、空をすらも絶する絶空に説明などあるうはずがない。何があってもおかしくない。とてもかくても候。※「どうなつても、ようしゆうございます」の意味。世の無常を想えば来世を願うのみ、現世のことは、どうなつても構わない、という趣。編者不詳『一言芳談抄』より。「なぜ、非存在でなく、存在か」

など問ふも愚か。宇宙開闢の原因・理由・根拠・意味・意義など考えるまでもない。睿か。狂奔裂乃ち是狂奔裂をすらも牽き裂き千切り破り棄つ異端の窮み、却って、日常茶飯事。空前絶後の叛狂奔裂、寧ろ、凡事へ還る。静寂莫の裂帛たり。仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺す勢い、狂い咲きて傾く、それ究竟平常道。※「いかにいたせば、平常道に至れるでしょうか」「為さんとすれば乖離してしまふであらう。とは言え、為そうとせずば何も為せず。又、為さぬと想うも

為すのうちである」。空是空なれば非空（実存）。蕭々たる雨に濡れそぼる石彫りの、路傍の草叢に孑然とたたずむ道祖神、雫をつたわらせ、緑濃く苔生したる。

梵鐘の鳴動で宝塔の軒の下に吊るされた青銅製の風鐸が微かに震える。

それが儼かな雰囲気を醸す。闇。何もない。何も見えない。意識は分別のない、未だ蒙昧な、昏沌たる夜であった。鐘の音声が臍下に眠る魂魄を低い振動「どをみん、どをみん」で呼び醒す。僕の基へ曖昧模糊ながらもじぶんがじぶんへ還るような、漠然とであるが、そんな感覚があり、光がようようと差すように、意識が少しずつ息を吹き返した。生命が甦り、幕が開くように世界が現象し、瞼が開くと同時に展開する。

冬睦月。いつものように、黎明の前の昏い刻に起床した。見えずとも墨や硯や筆などの

存在を幽玄と観ずる。存在とはそういうものらしい。無意識にそう思いながら、布団をたたみ、衣を整えるうち、うつすら空気がおみを帯びる。

障子を開けて房から狭く暗い廊下へ出た。屋内でも息が白い。角を曲がって少し幅ある廊下に入り、同じく若き一人の僧と遭う。その後を歩き、建物の外周を巡る外廊下に出る。雪冷えした空気が冴え冴えとして、肅として爽やかだ。そこにはまた、幾人かの僧がいた。小さな流れが集まってやがて河となるように、分岐する外廊下を渡るうち、次第に合流し、皆で静々と歩む。階を下り、雪駄を履き、石敷を逝き、大伽藍の本堂へ。雪駄を脱いで階を上がった。奉燈を灯す。

釈迦牟尼像の前で皆ともに読経した。修禅堂へ移動の途中、白み始め、坪庭の枯山水が見えた。大小もさまざまに、苔のむす石が片寄った、均等ではない配置に置かれ、静なる動の沈黙をなす。白砂に引かれた水流の線文様もまた然り。鋭く刈り込まれた濃い緑の椿が沈と寂莫。

石が儼く荒々しきおもてを晒す。ふぞろいに偏りながらも、齊いたるさまを觀ぜしめる見事な配置であった。いつ見ても新た。清々しくもつましく、深く澄みたる美しさであった。

ただ、時々襲う動悸のような動揺が、暗鬱さで胸を塞ぎ、息が苦しい。重たい、どんよりとした物に呼吸が遮られた。いつも何かの契機で蓋をされるこのところがほんの束の間の安堵を覚えさせられる。存在の不安など言えば、演技のし過ぎであろうか。確かに僕も気取り過ぎとを感じる。そういう感性だ。だが、実はそんな高尚ぶったことではない。実際は、もう少し切羽詰まっている。存在していることが無防備なまま裸体で荒野に晒されているように感じ、縋るものが見つからなくて、暗黒の濁流のなか、儚い筏で怒濤に竿差すような、確かさと安定を求める不安の根源は、生存への不安であって、生存への本能が僕を超えた意識の奥底から、僕を凌いで渴望しているのであろう。そういう恐ろしさも、芸術が慰めてくれる。御仏の道の齊たる美が。存在の不安という詩句も、こころをわずかに慰める文學となる。

見るうちに何かがこころに滲み透り、祓い清められたようなきぶんになった。かようにこころ洗われることも又、魂の汚れや燻みである執著を拭い、世俗の汚濁を厭離するといふ御仏の道への一歩へと繋がる。

肅々と務めを果たしていった。決められたとおり整然と移動する。禅堂で坐禅し、その後、一杯の粥と二切れの沢庵漬けとの朝餉を済ませ、房へ戻って丁寧に経文を読誦した。

声を肚からゆるりと湧かせながらも静かに。

連子窓から、半ば無意識に、素朴な垣根の庭を見遣る。未だ咲かぬ古い梅。生きた枯山水みたいだ。

さりげない平凡な日常に添えられた古典の美に浸る時、僕は歴史に個我を埋没し、安堵する。永遠に、こうしていたいと欲する。仕事も務めもせずに、終生、芸術に埋没したい。御仏の御教えの精緻な美に耽溺して生きていたい。真理の大伽藍に住まう永遠の住人として暮らしたい。諍いや欲望や搾取や生存から乖離して。儚い望みだ。

ひと切れの雲が流れた。翳が過ぎる。風に木の葉が揺れた。雀が庭木の下の苔に降りて何か啄む。しばしの休憩を終えた。再度、衣襟を確かめる。房を出た。勤行が続く。

夕餉を終え、孤^{ひと}り、しずかに読経した。その後は少し読書をし、やや飽いて、パソコンを立ち上げる。

既に真夜中であつた。

ふと。

気がつく。そこへカーソルを置くと、矢印のアイコンから、指差す手のかたちのアイコンに変わることに。行燈の暗い灯明のなか、不思議なことだという想いに囚われたが、何でもないことであつた。ただ、それだけのことだ。寺はじんとして静かであつた。液晶画面が鳴るようにさえ思えた。むろん、そんなことはない。違和感のせいかもしれない。僕はパソコンやスマホを持ち込むことを否定していたが、一ヶ月くらい前から使い始めている。調べものが速くて楽だし、大量の電子書籍を保管することもできるし、本の購入も簡単だから。

「売れるものしか電子化されていない拝金主義がいかにも卑しく浅ましく悔しいが」

下卑た、くだらない、腐った、功利の世を厭離して今、ここにいる。過去を捨て、未来を待たず、今を丁寧^{ていねい}に、ここを逝き渉らせて生きる。そういふ清浄を求める生き方も、一つの欲望なのである。いや、そんなことじゃなかった。

そう、それはあるホームページの隅であつた。見た眼には何もない。青い無地の背景がある丈であつた。青い無地は平らかでなく、青いパウダーのような質感があつた。濃い青が紫の眩さを放つ。鮮やかながらも、深い紺碧。まるで、気づかれたくないかのようであつた。運命に導かれた人のみが見ればよいと言わんばかりの仕込みである。

しかし、指差しアイコンが変わるということは、クリックすれば、統一資源位置指定子 (Uniform Resource Locator ユニフォーム・リソース・ロケータ、URL) が反応して指定

されたネット上の位置に飛べるということだ。

クリックした。

特別なことはなかった。新たな頁が開いた。英文、和文、仏文、中文、独文、伊文、西文、露文がロゼッタ・ストーンのようにならぶ。それに加えて、間違った（不合理な）数上の集合の数式があった。それらのどれかをクリックすると、ブルース・ハーブの音が一瞬、鳴る。意味不明だ。

なぜだかわからないが、僕は想った。このハーモニカを吹いた人に会おう、と。だが、今すぐにはない。いつか、時節が来たら。暫く先のこと、少し未来のこと。漠然とそう思い過ぐすうちに、いつしか時はささと流れ、皐月の田園風景を、僕は車窓から眺めていた。

眞神郡まがみの龍吞村りゅうどんに住む天易真兮あまやすまことやくんを尋ねる次第となったのである。高揚しつつも、ぼうつとして、半ば朦朧とした状態であった。それでも、不思議と龍吞神社の古い参道沿いにある彼の家に着く。些細なことであったが、平々凡々たる僕の日常にとっては、唯一の破綻、ささやかなトピックスであった。

参道に沿って間口をならべる家屋敷の一つに入り、衝立のある大きな玄関から客間に上がったものの、茶室へどうぞとお女中さんに案内され、一度脱いだ雪駄をまた履いて外へ出る。

濃い青竹の建仁寺垣のある露地には水が打たれていた。歩み、蹲踞で手を清め、待合で待つ。老椿や楓、梅の古木があった。真兮くんが迎えに来る。折り戸を開けてくれた。奇妙奇天烈な格好で。

それを喩えて言えば、The Beatles の『Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band』又は The Rolling Stones の『Their Satanic Majesties Request』のジャケット写真みたいな、サイケデリックなすがたである。

上から下まで呆れ眺めてしまった。

顴の広いウィザード・ハットは黒いフェルト地の尖った細い三角錐の山高で、山が斃れている。手入れをしているようではなく、磨れテカっていた。五年くらいは毎日使っているであろう。そんなことは一向気にしている様子はなくて、澄ました表情で片眼鏡を細く高い鼻梁に掛けていた。

長い髪は帽子の下からあふれる瀧のように、尻下まで波打ち落ち、頬髭や口髭や顎髭が臍下まで垂れている。毛質は艶がなく、乾いてパサパサしていた。黒よりも灰色のように

感じられる。

膝下丈のミリタリー・コートの生地は艶やかな繻子、パステルのような発色の水色であった。胸にはきらきらと燦めく金糸の紐飾り、肩には房飾りがある。刺繍の入った大きな襟は顎を隠すように立ち上がって折れていた。ピンで留められたカフスにはレースが奢られている。

派手なペイズリー柄の真紅の絹のタイを、マフのように首にぐるぐる巻きにしてフランス革命後に流行ったスタイルに結び、いつも海泡石のキャラバッシュ・パイプを咥えていた。

マッチ棒のような脚に Levi Strauss & Co. のスキニーな十六オンス・デニムのジーンズを穿く。その裾は形崩れした蛇皮のロング・ブーツに収められていた。

緩くたわんだそのブーツは本来、筒状で、膝下まで届くものであるが、その半分くらいしか至らず、だらしなく垂れ、ルーズ・ソックスみたいに見えなくもないが、そんな訳もない。

僕は少しあ然とし、戸惑いさえ覚えたが、さようなことで動揺していは禅門の末に縋る者として恥ずべき事態とこそ思われ、こころ糺して深く辞儀をした。

「土埃慈雨どあいじう（僕の法名）と申します。

叢林にて求道を始めたばかり、釈迦の教えに参学し、釈迦の道を修行する者の端くれ、入衆です」

僕の青々した剃髪の頭を繁々と眺めながら、彼は、

「小生が天易真兮です。

遠路はるばるようこそ。さあ、どうぞこちらへ。ところで、いきなり無礼を言って恐縮ですが、少し変わった法名かと」

「僕は土埃つちぼこりです。

そう言われても、リアクションに困るかと思いますが」

しかし、真兮くんにそういう様子はなかった。全く自然な表情。むしろ、さもありなんという得心の顔であった。僕は少し言い澁みつつも、言葉が続けた。

「でも、それは卑下でも絶望でも自己否定でもありません。たとえ、僕が死んでも世界は変わらない。ただ、乾いた無色透明の、明るい晰らかな事実の世界が在る丈です」

彼は初めて微笑した。もし、拈華微笑というものがあつたとしたら、こんな微笑か。愛想笑いをしない人だとわかつた。

「善哉。」

人は皆、同様に土埃でありましような。誰も彼もが君の考えるように想って生きていれば、こころはさぞかし楽になることでしょう。世俗の価値、塵芥を厭離していれば。されども、世には真逆の価値観が蔓延っている。掛け替えのない人生、唯一無二のじぶん。それら皆、不幸の始まりだ。自己満足の儚い虚構世界だ、実存在のない世界、空疎な世界、魂のない世界だ」

「そう思っ、法名をつけていただいた訳ではないのですが。師はおれを虚しうせよと言われました。それがこの小心のじぶんには必要と思われたようです。あり難く想い、僕はとても嬉しいことと考えましたけれど。」

世俗の価値を儚く考えられますか」

「別に。」

全ては自在です。かたちを持たない、空です。つまり、今在るこのままの現実で一向構わない、このまま固定の現実で差し支えない。空は無空を超えるのです。空を凌駕し、固定した物的現実です。局所の実在です。量子論では否定されますが」

僕は戸惑いながらも、

「色即是空空即是色とは、まさしく仏教に古来、伝わる教え。それをリアルと思っておいでなのです。現実として、事実として踏まえておられる。稀有なこと。奇特なこと。です。大変あり難く想う次第です」

「いずれにせよ、何を以て事実とするか、リアルとするのか、いや、それ以前に事実という設定・価値バリュが何であるか。それを知らず、定めずして、何を言おうが、何を況やですがね。」

しかしまた、そういう類のことを知り得るかどうかと言われると、甚だ怪しい。いや、そもそも、知るとは何か。わかるとは何のことか。それじたいも問われるでしょう。

だがしかし、その解答を得ることは、実際には、恐らく不可能でしょう。不可能なミツション。あまりにも根本的過ぎてね。我々は無根拠・無条件に是認された前提がなければ、思考を進められない。

逆に言えば、無条件前提なしで、零から論理のみにて説明・構築できるものなど、何もない。何もかもは、ドクサ・暴力・唐突、でしかないからね。

答は風のなか、探しても無駄。何千年も経ちますが、未だ何一つも遂げられず、どのような結論に収まっていない。未遂不収のままです」

初対面でこの洗礼、僕は驚くばかり。

「いきなりのご高説で、大いに戸惑っています。

ちなみに、仏教で云うところの顛倒夢想をあなたはどう思われますか。世俗の価値は真逆という趣旨ですが、十把一絡げに世俗の価値と申しまして、金銭の欲から親子の情愛までさまざまあります。家族という価値観は人の根本的本質であるとともに、子孫を残すという生物学的な根源的な命題からも、そう軽々に否と言えるような、安易なものではないと、こころ得ますが。

その消息をお尋ねしても宜しいでしょうか。お試しする意図では、むしろ、ありません。純粹に教えを乞いたいと思いい、伺う次第です」

「親子の情もまた世俗の価値、顛倒夢想です。それゆえ、釈尊は梵天から勧請された時、はつきりと布教を拒んだ。世の価値と相容れず、世俗の人には、理解し難い。社会の基盤を根底から覆してしまう」と。

ただし、この世が顛倒夢想でなかったとしても、一向に構わない。自在無礙ですから。しかしながら、顛倒夢想なのです。自在無礙ですから。それが現実です。その既決定性が現実です。その非情性が現実性です。ただ、あらわれた結果が現実です。起こったことが事実です。

それが現実です。現実という厳しさです。そのなかで、人は選ぶしかない。人それぞれ本性に遵って。こころぐにあるべきでしょうね。正しき道をね」

「それぞれにですか」

「むしろですね。考えてもみたまえ、たとえ、そうしなくとも、人は皆、必定的・結果的に、そうになってしまうではないか。他にない。それで構わぬ。というか、それしか現実がない。

君の言わんとするとおり、親子の情をも顛倒夢想とすることは難しいことです。

親子の情は子孫存続への本能であり、遺伝子を継ぐ生命としての本質の根源だ。簡単に超越できるものではない。いや、ほとんど不可能だ。それは細胞の奥の真から湧き上がる本性で、それを大海に喩えるなら、小生らの意識や意思やころなど、一番の表層部に過ぎない。表面に過ぎぬ。水深一万メートルの大海の海面に浮かぶ一枚の儂い木の葉に過ぎない、なされるがまま、波の間に、ゆらゆら揺られ、飄々と流される。どうして大海の意志を超えられようか」

なされるがまま、という言葉聞いて、僕は莫迦ぐしいことを問う輩であると思われ

ることを危惧しながらも、積年の疑念を問う。

「人に自由意志があると思いますか」

真兮くんは連れない表情で、

「ないだろうね。」

生命は化学的な作用の集合・集積が複雑細密精緻に相互繋関与して構築する現象でしかない。人は機械にころがない、人工知能には高い計算能力があっても、ころがないと言う。しかし、そうであろうか。いや、人間こそ、ころなどあるだろうか。

機械はスイッチを入ると、設定どおりの作動をします。人間も同じです。侮辱されれば怒り、尊厳を傷つけられれば悲憤慷慨し、望みが叶えば喜びます。そのスイッチが入れば設定のと通りの作用をする。もし、喜怒哀楽を事象に関係なく自由に選択できれば自由と言えるでしょう。親子の愛も然り。設定のと通りの作動に過ぎない。それは紛れもない、科学的事実です、普通の人が普通に知る範囲内の科学に於ける事実、常識的な範囲内の科学的事実です。しかしながら、実在を量子論的に否定する立場なら、もしかしたら、親子の愛や人間の情も、世俗的な幻・思い込み・誤認ではなく、客観的に実在する事実であるという可能性もなきにしもあらず、かもしれません。ふ。愛情の実在性も一縷の望みがあるやもしれません」

量子論によれば、我々が通常思うような客観的実在は否定される。客観的事実は観る者がいようがいまいが変わらないはずであるが、光線に関する科学実験に於いて、観察者がいる場合といない場合とで実験結果が異なるという観測結果が得られた。すなわち、観察されている場合に光線は光の粒としての性質をあらわし、観察者がいない場合には光の波としての性質をあらわしたという。

真兮くんは言葉を続け、

「いや、しかし、量子論学者のそういう説には、あのアインシュタインが否定的でしたね。彼は言った、『いったい、君は君が見ていない時に月は実在しないと信じられるかね』ってね。確か、そういう感じの言葉だったと記憶するが。まあ、つまり、そういうふうに否定した。となると、小生も何と申すべきか、わかり兼ねる次第。扱^き。

話に戻しましょう。君の問う自由意志についてだが、パッションという言葉が受動という意味を抱くことを考えればわかり易い。感情は人を襲い、人を占領する。人は感情という暴君、専制君主に支配される。自由でなくなる。こころの赴くままとは、寧ろ、不自由の証でしかない。それは自由という口実・大義名分で、ただ、樂がしたい丈なのだ。自然

が人のところに与える情のなすがままになっているに過ぎない。

イマヌエル・カントが規則正しく毎日三時に散歩したのは、それが自由だからだ。普通の人間なら、今日はサボりたいとか、気が向かないとか、自然が人に与える情のなすがままに流されて、なされるままになるものであるが、それを意志で制御し、躬ら決定し、いかに生きるかを選ぶ。それが自由であるということだからだ」

と言いながらも、真兮くんは鼻尖でふっと笑った。

「こんな考え、誰も共感しないだろうね。しかしながら、ただ、事実を中立的に述べている丈なんだがね。是非もないことを。無色透明、無味乾燥なことを」

僕はおづおづと言う、

「いずれにせよ、感情というものは、抗い難い人間の自然なのでしょうね。自然が人間を衝き動かす強い力。とても逆らうことも、否定することもできない、じぶんよりもじぶん自身であるものでありましょう。むろん、親子の愛も」

「そうだね。自然な現象です。降雨や流水や空に浮かぶ雲や潮の満ち引きのように。西行の和歌に『ころなき身にもあはれは知られけり 鳴立つ沢の秋の夕暮れ』というのがあります。出家して俗世の感情を離れた彼のような人間でもあはれを感じるものだと言っている。秋の夕暮れに鳴が飛び立つ沢の光景が彼のところです。

自然に対して親愛の情がなければ自然は何も語りかけてくれないという考えの人が少なからずいることはご存知か。小生もそのとおりであると想う」

唐突に何を言うのだろう、理解しようとして、僕の思考は全力で駆け廻った。真兮くんは構わず説を続行し、

「畢竟、自然がところを持つのではない。天地は有情ではない。

有情が天地です。有情が客観的事実なのです。有情が外部に実在するのです。外部に実在する非情な、客観的他者、事実ということなのです。

世界は意識であり、意識は脳裡の外にある。又は、こころです。こころとは、現実です。こころとは、現実であり、客観的に存在するもの、実在です。こころは物的存在である。こころは非情な、物的実在です。外部に存在する物です。存在は差異であり、差異は意識・こころの采配でもある。それらは躬らの差異を、他者として、躬らに依拠して外部に顕出する。

観察者がいる場合と、いない場合とで、科学的な実験の観測結果が異なるということは、もしかしたら、そういうことなのかもしれませんね」

梅の古木が微笑したように思えた。彼女は僕のころか。

「従って、一部の唯心論解釈には、誤解があると言えるでしょう。五蘊説への解釈の一部にも。

意識は物的世界を感覚が感受し、知性が構築して脳裡に映じたものではない。全く違う。こころと自然、すなわち、フュシス（古希臘語：あるがまま、現実、自然）とこころとは、同じものです。全く同じものです。

それは世が空であるということです。空であるからかたちがない、縛りがない、自由、いかようにもあり得る、だから、そんなことであっても、一向に不可思議はない。狂奔裂です。絶空とは、畢竟、固定的物的局所的な単体の実存在者です」

彼は長々立ち話をしていることに気がついたらしい。漸く動く気配を見せたが、やにわに思い出したかのように、

「まあ、補足するが、狂奔裂であるということは」

彼は「狂奔裂」という特殊な、異常な言葉を平穏な日常的语言であるかのようにさりげなく言う。

「むろん、〃かたちがない〃というかたちもないことでもある。

だから、そういうかたちもない、というかたちもない。

というかたちもなく、というかたちもない。

なので、かたちがない、かつ、かたちがないということではない。

かたちがないということ丈である。

かたちがあるということ丈である。

ということであれば、こころと自然とが同じものでない、ということであっても、何らの不思議はない。合一でも齊同でもない。

ただ、普通の人が普通に思うように、こころと自然とが別物である、と思って差し支えない。

単純に素朴、素直に、ただ、ただ、固定的な、局所的な物質的単一の存在者として在る、という丈であっても。ふ」

僕は折り戸のなかに入った。真分くんは天地を見渡し、

「見たまえ、これらが皆、こころだ。

客観的な実在物とされる星や月や雲や雨や蒼穹や大地や海や山や草木や蛇やカエルや微生物や真菌や土や火や水や酸素が皆、こころさ。こころが自然そのもの、自然そのもの

がここだよ。

だが、それが何であろうか。

ここであると言ったからって、何であろうか？

何もない、何も変わらない、カエルはカエルさ。

まあ、それもまた、そういうふうに設定されているからですが。そういうふうに配慮されているから。采配されているから。

それを選ぶも選ばぬも、采配者・主催者である意識Ⅱフュシスの自由、っていう訳です。だが、それが何であろうか。同じことだ。意識が他者であろうが、何であろうか。結果は見てのとおりです。

ほら、ご覧のとおり」

腕をぐるりと廻して周囲全てを指で差し示す。その上で、深い髭の下で、贅沢なお世辞でも言ったかのように、豪奢に微笑する。その意味は不明だ。

「説明不要でしょう。」

論理的には、証明も検証も、無用なはずです。明らかなことです。

論理上（そう、飽くまでも、論理上でのことだ）、狂奔裂ということには証明が要らないからです。

ふ。自在無礙、絶空、自由奔裂。零以上の零。証左など、要するはずもない。何を証左すると言うか、絶空の」

真兮くんは折戸を閉め、先を歩む。清々しい森林のような匂い。緑苔の香り。

「何度も言うが、論理上はね。」

狂奔裂は限定されない。かたがたがない。真なる真の自由、空をも絶つ、何ら縛りもない狂奔の自由。

それゆえ、世はかようにある。

世がかように在るということ、これぞ空の証。空ということの証である。空といふとは、乃ち、さういふこと。

唐突だ。唐突であって、一向構わない。いや、寧ろ、大いに結構。原因も理由も経緯もなくてOKだ。

根拠もなく、それは正しい。だから、小生のこの説も、まんざら出鱈目でもない。飽くまでも、論理上はねえ」

「はあ」

まあ、さように指定すれば、さようとも言える。だが、それは全ての意見・見解について、同じだ。何となく、興味が逸れたかのように、美しい庭園に眼が惹かれ、視線が逸れた。

なぜ、逸れたのだろう。でも、鑑賞し、翫味し、感覚は喜悅している。飽くまでも感覚的でしかない、感性的でしかないものに。かつて、画家のポール・セザンヌが「しかし、私は（感覚的な）印象派を、美術館の芸術のように堅固な、永続するものにしたかったのである」と言ったが、じぶんの志も、本来はそれに近かった。それなのに、今は、まさしく真っ叛さまだ。気持ちが和らいでいた。厳格さが解けていた。

濃く鮮やかな苔深い露地を歩み、数寄屋造りの前に着く。いざなわれ、腰をかがめ、畳に膝を突き、躡口をくぐって茶室に入る。正坐した。

くぬぎの炭に火種をそっと置き、壺から竹の杓で茶釜に水を汲み、炭火にくべて沸かす。竹を細く割いた茶杓は竹の節がなほどこにくるよう詠えられ、節の内側を削ることによって、少し「く」の字に曲がりながら起き上がっている様子が、くびれた蟻の腰が立ち上がっているさまを聯想させ、これを蟻腰の見掛けという。

肩つき火櫓の備前焼の茶壺の蓋を開けた。茶杓で掬った茶の粉を碗に落とす。茶碗は美濃の白志野焼きであった。高台に土味を残しつつも、全体にたっぷりかかった長石釉が焼成によって白を醸す。

存在が滲ませる叡智だ。彼女ら存在者はいかような思念よりも甚深微妙な知を語っていた。そんな彼女らを前に、こんな僕が何をしようとしているのか、何を言おうとしているのか。あゝ、彼女らは思念よりも崇高だ。そう言っては、片手落ちか。思念も存在している。だから、思念は存在者だ。あゝ、虚しい。誰も興味のない話だ。嫌がられる小説だ。僕は本題を語った、唐突に。

「クリックして出て来たホーム・ページを観ました」

「らしいですね。ダイレクト・メールに“観た”と書いてあった、と聞いています」

それは眞神眞義塾附属高等学校文学倶楽部のHPの特設ページだった。

「根拠のない、勝手な妄想、言わば“妄言”ですが、ある種のコンセプトチュアル・アートだと感じました」

クリックして出て来たHP (<https://□1.0000.com/sylveeyh.◇2.0000.com/index7-2.html>) には、次のような記述が英語、日本語、フランス語、中国語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、ロシア語の八つの言語で記されていた。

『ニュー・ヨーク、ハーレム。古い赤煉瓦のアパート。黒い鉄製の外附階段。半地下の部屋の割れた曇りガラスの窓、寂しい歩道。玄関前の手摺つき石段。十二段あり、坐っている人がある。手に小さなブルース・ハープ。リードの震えのひずみは、半音下がった、即物的な、かん高いブリキ音と、ぶち壊れたチューバの低い金属の音が雑ざったかのような、不安定な、揺らぐ音程。乾き切った、深みやまろみや潤いのない、輪郭のきつい、存在のくつきりしたサウンド。真夏の昼下がりの、気怠い静寂を裂帛する、古い蛇口の栓を捻るような、響き』

それらの文字のいずれでも一箇所をクリックすると、ブルース・ハープの音が一秒と少し。くつきりした硬い音だと僕は感じた。しかし、聴く側のきぶんによっては、素朴な暖かみがある音だと思えるかもしれない。僕は想起起こしながら、感じたことをなるべく正確に伝えようと、考え考え、言う、

「ニューヨークの風景を巻き込みながら、太い輪郭線を、崛起りと際立たせ、一箇の存在を明晰に、強裂鮮裂に顕在させている。そういうふうに感じました。ハーモニカのサウンドという、一箇の存在を」

「ふふ。小生は倶楽部のOBですが、いわゆる、頻繁に来る迷惑な先輩、暇な人、うざい卒業生って奴です。別に気にするようなことではない。ふ。人は死に際になれば、皆、独りですから」

その意味の繋がりはいくわからなかった。他者など気にしても仕方ないということか。そんな僕の思案など、関係もなく真分くんは淡々と云ふ、

「まあ、小生は後輩らの屯する倶楽部に唐突に入室し、吹き、去った。それを録画していた後輩がいた。そういう事実があった。そういうことです。それ丈のことです。」

ちなみに、その後輩とは、小生にとっては、遠い親戚にあたる存在で、天易伊奈々^{い なた}という子でした。

咄嗟に、（一族のなかでも有名な）あの先輩がまた何かをやらかすに違いないと直感したんでしょうね。人間とは思議なものです。いや、生ある者は皆、不可思議なものです。実は何でも知っている。生まれたばかりの子犬でさえ、乳の在り処と飲み方を知っています。人も実は全てを知っているのです。当然でしょう、意識が制御している丈で、実際は、こころが森羅万象の客観的な實在、自然（「フュシス photos（あるがまま＝現実＝世界）」と言うべきか）そのものなのだから。

まあ、それはよいとして、伊奈々は小生の知らぬ間に、録画し、音声の部分丈をコンセ

プチュアル・アートとしてサイバー空間にアップした。彼女らの間では、最近、アートとしての小説、The novel as an artと彼女らは言っています、特にコンセプチュアル・アートとしての小説が流行です。文字や言葉に依らない文学です。又は、文字や言葉をコンセプチュアルな、オブジェとして使うアート、あるいは、デフォルメした狂言綺語や俚言俗語で構築した小説という形状のコンセプチュアル・アートなど。他にも、文字の形状を絵画のように構成したり、言葉の意味をキャンバスに色彩を配するように用いたりしながら、物語ではない文学を構築することなどです。

それも又、善き哉。アートは人の本質。かろやかに、おもむくまま、じゆうじぎい、じぎいむげ、きわかぎりなく、いづれをもよるべとせず、逍遙游す。ふ。されども、たかが小説です。It's Only Novel.]

英語で言い替える必要など全くない。いかにも軽佻浮薄だ。だから、わざとそうしていると感じた。そういう型の、承知の上の気取り。穿って言えば、承知の上の気取りを気取っている。

人の誤解を弄ぶと言えは悪く言い過ぎか、人の理解など求めない、どうでもよい、ということなのだろう、彼にとっては。そう思った。

囁きすらも裂帛と感ずる静けさ。

沈黙。

僕はそつと出された碗を愛でて、釉薬の織りなす艶や起伏、小孔や貫入などの景色を賞味するよう眺め、高台にある焼き締められた土味を堪能し、その滋味を味わい尽くしてから、ゆるりと茶を啜った。「結構なお点前で」

畳の隅は陰翳深く、沈ちんとしていく。

幽かな明るさの床の間に、青竹の一輪挿し。挿し口が斜めに切られていた。その角度がいかにも心地よい。芍薬、生き生きとしながらも、清楚で落ち着いた華やかさ。それに添えられた一枝は梅の小枝と推察された。当然、花はない。独特のセンスだが、樹の斑紋をなす地衣類までも想起させ、それを古の香のように感じさせた。古風な静妙が在る。彼らにも言葉があると思った。沈黙は雄弁であると言うが、それともまた違う沈黙の言葉、あるいは、存在が吟ずる頌を観ずるのであった。

僕は言葉にならぬ妙義を眼の当たりにしたような感じを覚える。そうになると、何だか今存あたるこの現実が空々しく思えて、そろそろ退室時かなと飽くようなきぶんになった。

「扱、ご教示の数々に深く感謝申し上げます。長居してしまいました。そろそろ、お暇い

たします。お邪魔いたしました」

暇乞いして躑口から露地へ。去りつつ、過ぎってから、蹲踞を顧みた。蹲踞もじつと僕を見上げる。知性を感じた。西洋で謂うところの知性だ。東洋で言えば、こころと言うのが適正かもしれない。いずれにせよ、この情は何であろう。

全ての問いは虚しい。格別なことなど、何事もなくても、存在者は、ただ、侘しく、もののあはれを覷ぜしむ。それをどうこう想おうとも、虚しく儂い。考えて分析するなど、あぢきないこと。それそのものに参入するようにすべきこと。平常道へのところであるが、目指すべきではないから難しい。

何ということもない日々を、ただ、過ごし、いずれ死して逝く。桜華が散り果てるように。碧い海の白い砂と真つ白な流木のように。朽ち葉が風に舞うように。厳しい銀嶺に映える皓月のように。それはなろうとすればなれないが、なろうとしなければ何事も起こらない。妙義の会得が必要とも言える。ともかくも、眼横鼻直をことさらに、眼横鼻直と言つて仕舞えば、そのところが喪われてしまうように、花鳥風月も、たださらさらと眺めるがよい。想いを追わぬところで。

しかしながら、僕は真分くんから何を聞きたかったのであろうか。僕が真分くんから聞きたかったことは聞くことができないものであった。無は存在しないということ。どこにもない。それが無ということであった。だから、僕は聞きたいことが聞けたとも言える、聞けていないからこそ。それはどういう聞こえ方かと言われれば、まあ、そう、たとえば、隻手の声※片手で打つ拍手の音。「隻手の声を聞く」とは、禪の有名な公案。を聞くようなものか。

ちなみに、真分くんが高野切こうやぎれ※『古今和歌集』最古写本の通称。その書は仮名の最高峰とされる。の模写が彫られた

文學倶楽部の木製引戸をがらりと開け、つかつかと部屋に入り、Levi Strauss & Co製の十六オンスのジーンズの尻ポケットに突っ込んで金属製リードを冷やさぬようにしていたハーモニカを出して、ベンド※吹奏の際に唇を強く当てて強く吸い、音程を半音から二音程度下げる奏法。し、かつ、ミュートした、金属的即物音を鳴らすことによって、観た者たちには一つの場面が髣髴したという。

それが『New York, Harlem. 赤煉瓦の古いアパートメント、玄関前の手摺つき階段に坐り、大きな手で小さなハープをくるむように持ち、唇を当て、痩せた細い脛と手首とを見せ、ラフな黒シャツにソフト・ハットを被った人』であった。

なぜ、皆に同じ想が湧くのか。それは摩訶不思議であった。不思議であったが、もう起こってしまったことだ。原因など想像もつかないが、ある種の集団無意識に訴えるものが

あったのか。ハーモニカの音が？　あり得ない。共同幻想などという聞き齧った言葉が刹那、浮かんだが、頭を振ってすぐに払拭した。

しかも、それは単なる空想ではなく、事実、存在した光景であることが、後にわかった。僕はたまたま YouTube で、それと同じ光景の動画を見つけたのである。当然のことながら、僕は真兮くんの即興を目撃したという文学倶楽部の生徒たちがこれを見た可能性があると、確認した。間違いないと考えたが、意外なことに、その動画を観た者はいなかった。念のために、それに類似、又は関連する動画、あるいは画像等を見た者がいないか、確認したが、それすらいなかった。他のメディア、たとえば、文章などに於いてすらもないとのことであった。

僕は得体の知れない眩暈を覚えた。何かはつきりとしなない、未解決の状態、謎のまま、不思議な暗合として明晰な解もなく、何となく暗澹とした心地、昏い憂鬱を覚えさせられた。幽玄な霧が降りて来て帳を閉ざすなかに封ぜられ、陥って逝く。そんな感覚になった。いたたまれない気持ちで、胸が苦しくなるような、壓されるようなきぶん。

そもそも、僕はこの動揺を払拭したくて、出家の道に入ったのではないか。中国禪の第二祖である慧可は心が苦しくて堪らず、達磨に教えを乞うため、断臂までした。僕もものごころついた頃から、この動揺を感じていて、中学二年生のとき、学校へ行くのが辛くなった。どうにか起きることはできた。休んだ日もあったが、登校し続けていた。両親や誰かに相談すべきであったが、誰にも何も言えなかった。当時は、存在の不安などと、気取った言葉を、その意味もよくわかっていないくせに、じぶんでじぶんに囁いて、きぶんを高揚させ、微かにこころを癒すようにしていたものだ。虚しいことだった。もっとじぶんに向き合うべきであったが、できなかったし、寧ろ、思いもよらなかった。受験に逃避して大学へ進学し、坐禅会に参加するうち、今の師と出会い、弟子となり、在学中、卒業間近の頃、得度を受けて剃髪し、受戒して僧となった。一時、精緻な妙法の世界に陶醉し、七堂伽藍の下、教えや瞑想や仏像や菩薩坐像や瓔珞の煌びやかな美や金箔・金泥の屏風・障壁画や格子天井の図の壮観や枯山水の（白い敷砂の箒目が作りなす様式化された波状の幾何学的な文様によって、作庭家がそのなかに工夫を以て配置した自然石の不規則な荒々しさが突出して浮かび上がる）味わいの妙義に耽溺し、救われたような気もしていたが、再び不安は蘇り、安寧は長く続かなかったのである。

盛夏となり、僕は療養のため、海辺に暮らしていた。しばらく、眞神のことは忘れていた。海はとても碧い海で、白い岩とのコントラストが素晴らしかった。ギリシャの海、エ

ーゲ海を想わせた。

サーフボードのチューニングをする小さくて開放的な店、剥げたパステル・カラーが素朴なテラスのカフェ、椰子の木を一本植えた古いカクテル・バー、懐かしい雑貨屋などなどがならぶ、佻しい「メインストリート」。

どれもこれも乾燥し切っていて、素朴に粗く、寂れていることが開放と解放とを感じさせてくれた。

そんななかに、うら寂れた美術館がある。

古典期ギリシャの大理石彫刻やエトルリアの壺が展示されているが、むろん、レプリカだった。青いペンキを塗った板に白い文字で、アフロディーテ美術館とある。中学校か高等学校の美術教室にあるような貧相な模刻であった。夏の正午の白茶けた寂寥とともに、懐かしい哀しみを覚える。

とは言え、太陽神アポロンの彫像には深いプレゼンス（存在＝肯定）を覚えた。レプリカの原型を写真等で知っているからであろう。まあ、それもローマ時代にギリシャ彫刻を模したものであったはずだが。僕はイヴ・クラインの青を無意識に想起した。地中海の海や空と重なったせいであろう。青には肯定の意味があるやのように想われた。晴れ渡った蒼穹は聖なる肯定そのものだ。理窟抜きで。

イオニア（Ionia）それはイオナともイーオーニヤとも聞こえた）と出会ったのは、その美術館であった。なぜ、立ち寄ったか、もう憶えていない。

真夏の陽射しに焼かれた足の指をサンダルから覗かせた少女の姿。それが外から垣間見えたからかもしれない。彼女は受付に坐り、入場券のもぎりをしていた。金髪碧眼、元は白皙であった皮膚は日焼けのため、黄金を帯びた小麦色をしている。

入ると、館内は静かであった。僕の他に入館者はいない。

彼女を顧みる。館長の娘だが、ギリシャ人ではなく、ウクライナ人であった。父アレクサンドルはギリシャ系で、母親ジョニアはスペイン系とクレオール系の血を引く。

館内は廃れたペンションを改造したもので、明るいペパーミントグリーンの壁色が剥落し始めていた。古代を空想するうちに、そんなささやかな時の簾れにさえも、蒼古の翳りを観ずる。

さまざまに想いを楽しみながら、廻った。

僕は偉大なるアテナ女神像やイズミールのゼウス雷霆神像、レオカレスのアポロン神像やデルフィのアポロン像に崇高なプレゼンスを感じつつも、『蜥蜴を殺すアポロン』像の

艶かしさにも、優しい美を想い、美の本質とは何かを問う。問いながらイオニアを顧みた。

美しい女の子だ。哀しみを感じさせた。小学生や中学生の頃の恋を思い出したからである。太陽のような生の輝きを放つのに、そういう切なさを観ぜしむ何かを湛えている。若さ、柔らかさ、儚さ、初々しさ、切なさとは真逆なそれらがなぜ観ぜしめるのだ。生命にみちあふれ、澆刺と、生き生きとしているのに、青空のような哀しみを覚えさせる。僕の虚しさの琴線をも奏でた。

まだ十四、五であろう。出家の身であった僕が想うのは、不謹慎なことだったかもしれないが、異性として惹かれた。だが、もっと惹きつけられたのは、その眼だった。双眸の燦めき、瞳の虹彩がなぜか古代ギリシャの文字の羅列の円環のように、古代の神聖なスペル（呪文）のように見えた。あるいは、燦めく瞳のアテナ女神のように。古代の大らかな蒼穹に聳える智慧と戦闘の女神。

妄想でしかないが、言葉ではない、自由な、絶妙の真理を、直截の実体として存在させているかのように想えた。三鈷杵や聖剣や聖杯のように。金の瓔珞やフラボアイヤン（炎のような）様式の狭間飾（トレーサリー）やステンドグラスの薔薇窓のように。ルクソール神殿のヒエログリフのように。ウジャトのまなざしのように。諸仏が八葉のかたちのなかに配された中台八葉院のように。曼荼羅のように。黒漆の地に螺鈿を象嵌し、金粉の蒔絵を施したかのように。

全くどうかしている。そう想うと、逆に「まあ、それでもいいや」という「闊達」調のきぶんも湧き上がらなくなかった。求道に取り憑かれて、少々の躁状態、少しおかしくなっている丈だ、ただ、それだけのことだ。Only this, and nothing more.

僕は振り返ったが、勝利の女神ニケの像が沈黙している丈で、Nevermoreと言う者はいなかった。

その夜、潮風に当たって、きめ細かな白砂の浜で坐禅した。月が皓々としている。寄せては返す潮騒が聞こえるのみであった。剥き出しの宇宙の吸い込まれそうな、広大なる奥行きに、鏤められた、夥しい、怖い数の星々。沈黙が轟音を立てるかのようであった。想う。

「あゝ、彼女は彼女じしんが真に究竟なる真実義それじたいであるとは、夢にも考えないだろうな。この世は何と甚深微妙なのだろう。理など何者でもない。合理など足枷しかない。甚深微妙の美よ、実に稀有なことだ。神の秘蹟だ」

明月の静夜。あらゆる神秘的な思想が舞い降りる。しかし、その刹那だった。

破裂するかのとき爆音が起こる。バイクの排気音であった。V型8気筒エンジンの重い低音。

「ふむ」

僕はやむなく砂を払って立ち上がる。帰ろうとし、舗装された公道に戻った。

街燈のない道路、パンク・ロッカーがいた。バイクから降りて、海を眺めているようだった。バイクの補助灯に照らされ、その奇妙な姿がわかった。

金髪が、じぶんでカットしたような不揃いな、よく言えば自然にくしゃくしゃな、短めのスパイキー・ヘア、一九七七年のジョニー・ロットンを想起させる。髪型のみならず、ファッションもしかり。Tシャツの袖は継ぎ足して手腕よりも長く延長しているため、拳を隠してだらりと垂れ、シャツの正面には逆さ十字架の磔刑像とハーケンクロイツのプリント、太い業務用の鎖を首飾りにし、南京錠をぶら下げていた。黒革のパンツに、鎖と革のストラップが何本もついたブーツ。僕とは真逆なキャラクターだ。縁なき衆生。

特に避ける訳でも関わろうとする訳でもなく、ただ、ぼんやりと、過ぎ去ろうとしていた。

「あ」

アメリカのバイク・メーカー、カノン・モーター・サイクル社による排気量8200ccの『ビッグ・カノン』だ。オートバイとは思えぬ巨大エンジンを持つ。出家する前の僕は巨大なもの、強烈なもの、精緻なもの、最高のものが好きだった。アイテムというものは自己の延長として愛されていると思う。人が良きアイテムを欲しがるのは、所有の欲を満たし、狩猟・征服の欲を満たし、拡張された自己の尊大を楽しむ、自己が崇敬され、生きるに値すると賞讃されることを感じ、自己肯定の陶醉を感じるからであろう。僕はその起源が生存欲にあると見ている。生き残って子孫へと生を繋ぎ、種を残したいとする欲望だ。僕の嗜好もまた、この例に漏れず、自己肯定への渴望であり、生存への意志を源の動機とする、と自己分析していた。

それは扱おき、じぶんでは気がつかなかったが、きっと『ビッグ・カノン』という名称を口走ってしまったのであろう。金髪スパイキーがそこへ突っ込んできた。

「へえ、お前、坊主なのに、こいつに興味あるんだ。ま、俺ん家も寺だがよ」

無視して逝き過ぎることとしたが、彼はさらに、

「おい、こんなに良い月夜にシカトかよ。風情がねえな。なあ、シカトって花札が由来の言葉なんだぜ。くっ、くっ。バカバカしいぜ。くっだらねえ、あはっ、あはっ。……って

無視かよ。縁なき衆生って訳かい。へっ」

風情がない？ ま、いいさ。

名月のときに不粋な排気音をぶん流す方が、よほど風情がない、と思ったが、言っても、意味がないであろうし、そもそも、感性は人それぞれだ。そう思って、なおさら、過ぎ去ろうと急ぐ。

金髪スパイキーは呵々大笑した。

「そうか、あはは、わかったよ。じゃ、またな」

またな？ また会う訳がない。宿に帰る。疲れてすぐに眠れた。珍しい。

朝が来る。夏の真っ青な空、まぶしくくらいに輝く白い入道雲。それがなぜかもの悲しい。青春時代に感じたような気がするそんな甘い感傷に浸りつつ、僕は感慨に耽って海を眺めていた。

僕はまた漠とした動揺を抱きつつ、アフロディーテ美術館へ赴く。

「こんにちは」

イオニアともすっかり顔馴染みだ。僕はうなずいた丈で返事をしなかった。

館内に視線を移し、驚く。

「天易さん」

あの奇妙奇天烈なふうていの彼が狭い館内の（邪魔でしかない）古いソファに坐っていた。

「おや、こんなところで会うとは」

「僕の方こそ吃驚です。こんなところ（いや、失敬！）に、なぜ」

「いや、こういう侘び寂びのきいた場所が嫌いではない、寧ろ、好きなのだが、今回の目的はそれではなくて、実は、彼女でね」

鬚で覆われた顎でイオニアのいる方向を示す。

「え、彼女が、ですか」

いかように反応してよいかわからず、僕はそう言った。

「むろん、色恋沙汰じゃない。まあ、話しても頭がおかしい（話さなくてもそう思っているかも知れぬが。ふ）と考えられる丈かも知れぬが。」

まあ、外で話そうか」

すぐに出るのも、不自然であるため、少し館内を鑑賞して廻った。廻りながらも、何かを話さずにいられぬ性格らしい。

「古代ギリシャの地中海貿易などによる繁栄が高い芸術や哲学を養った。仏陀の生まれたシャーキヤ族の国はコーサラ国の属国で、コーサラはマガダ国に滅ぼされるが、商業の発展により繁栄していた。

文化の発展は経済的な繁栄・安定と無縁ではない。古代ギリシャ人の民主政治は奴隷制のもとに成立していた。彼らは午前中に働き、午後はスポーツや芸術や哲学を楽しんだ。『労働は魂を瑕つける』とは彼らの言葉だと聞く。

これほど偉大な芸術はそういった環境でしか生まれ得ないのだ。人は富によって天国へ近づこうとしているのかもしれない。

無為徒労だが」

それから、外へ出た。

出た途端にむわっとする。相変わらず、夏空だ。全てが白っぽく見える。影は濃く短く、輪郭が明晰だ。

「実は我が天易家は真神の一族のなかでは、天文占星や風水、陰陽や八卦、太占、四柱推命や奇門遁甲を専らとする姓で、ここに聖なる女神『いりや』の系譜に連なる象徴が生じたことが判明した。

象徴はまさしく象徴で、事物のときもあるが、星天の運行のときもあり、又人としてあらわれることもある。今は彼女の双眸だ。

あのロイヤル・ブルーのサファイヤのように、ブリリアント・カットされた青いダイヤモンドのように、あるいは海の深さのように、奥にいくほどに幾つもの層となって重なる青や蒼や碧や藍や紺の立体モザイクである眸の虹彩。生存が絶えるほど純粋に透く瞳孔の水晶体。

言語や考概を超えた、実在の真理だ。

甚深微妙なことなので、全く何を言っているのかわからないと思うが」

「全くわかりませんが、何となく、察しがつくと言うか、わかるような気がしなくもないです」

「そうさ、察しとは不思議なものだ。全てを超越する。人は何で察しがつくのだろう。実験と突合された理論からか、経験による類推からか、いずれにせよ、なぜ、理論や類推が察しになるかは誰も説明できない。

むしろ、人は予め全てを知っているのだ。

いや、人に限るまい。動植物も昆虫も。だから、生きることができるのであろう。真菌

もアメーバも。土も火も水も空気も存在できるのは、それゆえであろう。空も雨も空気も太陽も星も月も、無空も。皆同じもの・ことを知り、同じもの・ことを考え、同じもの・ことを真究竟の真実義と捉える。ある意味、萬物齊同、齊物論さ」

全ては齊しく同じ、莊子の説いた説。差異はない。……だったと思う。違うかな。

何のことだかわからなくなった。そこへ唐突に、

「よお、また会ったな」

聞き覚えのある、軽佻浮薄な、世俗主義満載の、何でもかんでも、どうでもいいぜという無頼、即物的な、ドライで現実でしかない声。

僕は驚いた。

「あ、昨日の」

金髪スパイキーだ。突然あらわれた破調。金箔の大和絵の上の唐突な墨痕。真兮くんがやや怪訝な顔、

「何だ、知り合いか、叭羅蜜斗くん」

叭羅蜜斗と呼ばれたスパイキーはくしゃくしゃな尖りヘアをさらにくしゃくしゃにするように掻いて、片方の口角を上げる。

「昨日の夜に会った丈さ、名も知らん。真兮、お前の知り合いだったのか、その雲水」

真兮くんが嗅ぎタバコを嗅ぐ。

「そうさ、沙門の土埃慈雨くんだ」

僕は辞儀をした。

「土埃です」

「そうか。俺は同源どうげん。名は叭羅蜜斗、ってんだ、よろしくな。変な名前だろ？ 般若波羅蜜が由来さ。言ったよな、俺は家が寺だって」

「はい、聞きました。同源さん、昨晚は失礼しました」

真兮くんと絡めて考えると、日本情緒にロンドン・パンクも違和感はない。金箔や大和絵具の顔料や繊細な筆使いで精細に描き上げられた屏風に破墨山水のような墨痕を垂らす、一見粗くも見える勢いの破調による気魄の美に似て、趣深い。

「別に、どうってことないぜ。俺みたいなチンピラ風情に夜、声掛けられりゃあ、当然の反応よ。」

ところでさ、もしかしたら、お前の棲家からは遠いかも知んねーがよ、難久菰町の『ブラウン・シュガー』ってライブ・ハウスでさ、追悼ライブやるんだ。そら、チケット渡す

ぜ。気が向いたら来てくれ」

是非なく、受け取った。後で調べてわかったが、薙久蓑町とは眞神郡に属する。ここからも、僕の修行する寺からも、とても遠い。

「追悼？ どなたか亡くなられたのですか？」

「八年前、十七の頃な。同級生だ」

僕が十五の頃だ。

宿に戻ってから、もらった紙片（ちよつと懐かしい気もした）、チケットを見た。〃彝之イタル追悼 クアドラプル・ヴィ Quadruple V 復活、会場：『ブラウン・シュガー』、演奏開始時刻：午後八時、とある。

彝^い之イタル。

クアドラプル（四倍の）V。

聞いたこともない個人名とバンド名。ネットで調べた。いくつかヒットしたが、そのほとんどは眞神郡の人々のアップしたものだ。

地域で伝説となっていた。

小学生の頃（十一歳の頃であったという）、彝之イタルのハーモニカと天平普蕭のバイオリンとのユニットが起源だ。普蕭はもつと幼い頃から師に就いて音楽教育を受けていたので、演奏ができたが、イタルのハーモニカは全くのデタラメだった。その不協和な騒音活動は数ヶ月、もしかしたら数週間程度で、人前で演奏することはなく、その後、高校生になるまで途絶えていた。

高二の時、普蕭は公園で、音の合っていないアコースティック・ギターを滅茶苦茶に掻き鳴らすイタルと偶然、再会し、バンドを創ろうと提案する。イタルは否定的であったが、自己破滅的狂気から同意する。イタルがギター兼ボーカル、普蕭がドラムスとなった。ベース・ギター奏者を探し、パンク・バンド『非』を鹹になっていた叭羅蜜斗をベースリストとして加える。

バンド名をVVW (Very Very Well-don が由来。King Crimson のロバート・フィリップが彼らのアルバム『RED』を評した言葉。WはVが二重・重複であるため、VVWとはVが四つあることになる。四倍のV、クアドラプル・ヴィ) とした。

練習を始めるも、まっとうな演奏がほぼできないイタルと、いつまでも粗く、荒削りなままの叭羅蜜斗とは諍いばかり。

その頃、薙久蓑町にあるライブ・ハウス『ブラウン・シュガー』は定期的にコンペを開

催し、ステージに出演する者を決めていたが、普蕭がこれに参加することを提案。イタルは不賛成だった。

「ステージはオーディエンスへの迎合だ。俺は妥協しない。純粹でありたい。俺は誰にも聴かせない。書いた小説も誰にも読ませない」

だが、自己破滅、自己異叛自己違逆的な狂気から、結局は参加する。イタルのギターが酷過ぎるため、助っ人として、犇^い之^の犇^い裂^れがギタリストとして加わり、その後も準メンバーとなる。ちなみに、犇裂という変わった名は、本来、イ裂としたかったところ（それでも変わっているが）を届出の際に、悪筆だった父がイをべとよめるかたちに書いて確認もせずにそのまま戸籍に載せてしまったことによるらしい。本当かどうか定かではないが。

イタルはステージでは狂絶なるプレイをし、最後にライブ・ハウスにあった数千万相当の機材を破壊し、親に負債を負わせた。

学校を停学になっていたイタルは復活後、顔面の左半分に鯨のように逆立つ青龍の刺青を入れて登校する。そして、復活早々、悪びれもせず、

「大衆に媚びない無観客のゲリラ・ライブをする」

そう言った。メンバーを促し、誰もいない深夜の公園でライブを行う。

狂気に満ちた破壊的な演奏をするが、警察が出動し、最後に『豪奢なる修羅の戯^{たむじめ}』という曲（後にイタルが書いた同名の小説が発見される）を歌ったときに、人類を呪う意味不明な言葉を叫んで、三つの盤が重なる噴水の頂点に立ち、ガソリンを撒いて火を点けた。業火に包まれる。

イタル以外は皆、補導された。イタル丈が忽焉と姿を消す。摩訶不思議のうちの一つだ。それは逃げたということではなかった。同じ夜のうちに聖域である眞神山の頂上にある、神聖な垂直の磬代の頂上に登る（どのようにして登ったのか、未だにわからない。登れるはずがないのだ。摩訶不思議その二だ）。

頂上に立った彼の姿がいかであったか、その表情は。今となっては、誰にもわからない。ガソリンを被って絶叫とともに飛翔し、燃え裂け死んだ。飛び降り自殺ではない。死という、最究竟最窮極の最狂裂パフォーマンスだった。

溜息が出た。独白する。

「伝説か。

悲劇と言うべきか、手厳しくは喜劇とも言うべきか。何と多くに迷惑を掛けた行為か、身勝手な思い込みの愚行であることか。

なるほど、褒められる要素は皆無だが、今の時代、こういう恐竜のような人がいなくなったなど、しみじみ思ほゆ。

今様は、あまりにも理が過ぎ、お伶俐になり、小賢しくも儂し」

なお、普簫くんが書いたイタルの伝記的な小説『Ekstase―脱自態―』はネットに公開されている。検索してみてほしい。それは扱おき。

薙久蓑町は主要幹線から見れば、支線の支線に在る町で、まさに眞神郡の入口に相当し、郡を構成する一町四村のなかでは一番（都会と言っては語弊があるが）都会的だ。前回、こちら方面に来たときは、眞神鐵道への乗り換えをするのみだったから、薙久蓑駅で降りることは初めてであった。残暑厳しい折である。アスファルトに陽炎が立つ。

駅の近く、神中洲は寂れた小さな繁華街だ。侘しさが懐かしい。こころが緩む。

そこにライブ・ハウス『ブラウン・シュガー』があった。一階が書肆で、地下がライブ・ハウスだ。一階も地下も、オーナーが天平普簫であった。むろん、高校生だった彼らがコンペに参加した時代は別のオーナーだったが、その後、彼が一階の古本屋とともに買い取った。

ちなみに、真兮くんには『人間存在の実存的分析による存在論考―「空」―』という著作があるらしいが、一階にある普簫くんの書肆で出版したらしい。ただし、上梓されたとは言え、薙久蓑の本屋で見られるのみで、眞神では『聖典』扱いのその著作も、他地域の書店には置かれていないとのことであった。（なお、それもHPにアップされていて、全く商売にする気はないらしい）

ライブ・ハウスは百人が立ち見をすれば、いっぱいになるような狭いスペースだった。壁際に、背の高い小さな丸テーブルを挟んで向かい合った二つのスツール、それが四セツトくらい。

それと、小さな簡易バー・カウンター。そこにもスツールが二つ。

壁はコンクリート打ちっぱなしだが、おしゃれでもアーティストックでもない。配管は剥き出し。

僕はカウンター席に真兮くんを見つけ、声を掛けた。

「来ました」

「やあ、土埃師」

冗談でからかわれた丈なのに、僕はじぶんの勝手な、一方的な忸怩たる想いから赤面し、「師ではありません。それに……」

最後まで言わず、真兮くんはスツールを指差し、

「まあ、坐りたまえ、もしくは喫茶去。いや、茶はない。ここに桃がある」

何を言っているのかわからなかったが、在るは天々たる桃であった。バーテンダーからナイフを借りて剥く。生命、家庭、幸せの象徴を真兮くんが剥く、そういうふうに見てしまうじぶんを、こちらのどこかで、せせら嗤っていた。そんな幻影、臆断、ドクサ、思い込み、空想など、水面に落ちた雫の波紋のようなものだ。山の早朝の霧のように何処からともなく起こったかと思えば、一瞬も止まらず、霧散する。

ステージはすぐに始まった。前座などない。今さらだが、喫茶去（茶房などで茶でも飲んでから出直して来なさい）とは禅語だ。状況的には意味不明。どうでもいいよ、っていうことか？

扱。

演奏は荒削りで凄まじかった。叭羅蜜斗くんのベース・ギターはアンサンブル性の欠片もなく、即物的で、ラフだった。

天平普蕭という人を初めて見た。欧州の十七、八世紀の貴族のような、いや、それともサイケデリックというもののなか、そんな聯想させる服装だ。コートやウエストコートには金糸や銀糸など多色の絹糸による織り柄が施され、コートについた大きなカフスや襟には派手な刺繍がある。ボルドー色の絹のシャツ、暗い緋色や緑や紺のペイズリー柄が主体のクラヴァット（ネクタイの祖型）。こうなるとコスプレなら下半身はブリーチズと膝丈の絹の靴下だが、細身のズボンとモロッコ革のような柔らかいブーツだった。

髪型はボブに近い長めのマッシュルーム・カット。振り乱してプレイは機械仕掛けのようにな正確なドラミング。

永遠の助っ人、彝之べ裂はシンプルで、ロックン・ロールなプレイ。狼の鬣のような髪型（何となく、一般に云う『真神』という言葉が狼の古名であることを連想した）に、紺緋、袴という姿。まるで、脱藩浪士ふうだ。革のブーツを履き、顎の尖った細い顔で鼻梁が高く、瘦けた頬、無精鬚。スカした顔で、クールに演奏する。

いい。しかし。

全体として、期待していた炸裂を感じなかった。やはり、イタルがいなければ、ただのアマチュア・バンドか。そんな印象だった。僕は何を期待していたのか。究極？ 究竟の真実？ それは、なぜ。答は知っている。権力への意志だ。真理が権威を与え、王になる。

神から天啓のように、王権神授のように。その光を浴びて燦然と輝き、世界の前に崇高に

立つ。自己肯定の絶頂だ。その快楽を求めているに過ぎない。人間の全ての生き甲斐は。演奏が終わり、ステージ裾で、真兮がバンドのメンバーに紹介してくれた。

その夏はそれで終わった。全ては虚しく消耗されて逝く。

ただ、記憶のなかで、叭羅蜜斗くんがべ裂くんを指差して笑う映像丈が残っていた。何で笑っていたか、知らない、又は憶えていない。ただ、映像丈が無声映画のように記憶にあった。

秋になって病は深まり、体調は回復せず、寺を辞した。還俗する。

失意のうち、北関東から北上する東北地方の錦繡を追ひ翔る旅をしていた。

僕は秋の錦秋の色彩の響き合いと、乾いた風の少しの涼やかさが帯びたものの悲しさにこそ日本の本質のようなものを感じる。あちらこちらで紅葉や黄葉を愛でた。

いつしか眞神郡に着く。

気がつけば、イタルくんの墓前にいた。異端の子とされて葬之家の墓地には、入れなかった彼の墓標は土から少し出た、起伏のある平べったい石で、草が伸び、苔が生し、地面から少し出た自然の石に見えた。もし、ジャン・バルジャンの墓があったら、こんなふうだったのではないだろうかなどと勝手に空想が虚しく駈け廻った。究竟涅槃と彫られている。そこは貞観正國寺という寺で、叭羅蜜斗くんの実家だった。

「奇遇だね」

僕は吃驚して振り返った。真兮くんがいた。

「なぜ」

「人は全てを知る。想起できない丈だ」

「それも、占星術ですか」

「いや。勘だよ。虫の知らせ。脳裡の抽斗から出て来たのさ。アカシック・レーコード、って知っているかな」

「全ての、あらゆる宇宙の記録、原初から未来までの全宇宙の記録」

「人間の無意識層の最真奥、集団無意識のさらに奥、全存在者の深層意識の最奥下底にあると小生らは考える」

「全存在者？」

「人も動物も、爬虫類両生類魚類、虫も植物も、水も空気も光も、有機分子も無機分子も、時空も概念も、非存在も、全てかたちあるもの、その在り方を持つ者は存在者だ。

存在者全てはその在り方に応じてそれなりの様式で“意識”というものを持つ」

「しかし、客観的・科学的な証明が」

尖りすました鼻尖で、

「ないよ。しかし、それが何であろうか。証明？ 検証？ いったい、証明とは何か。検証とはどういうことか。一つのやり方さ。」

証明という一つのやり方・方式、その妥当性やいかなるや。客観、科学、証明という概念、そんな思惟や考概など、そもそも、指定でしかない。架空、虚仮、仮の建築。

そもそも、言語や概念による捉え、理解ということ、論理という約束事、こころ、感情、精神、いずれも全ては科学的、かつ、事実に精密さ・正確さを以て言えば、神経細胞、いわゆるニューロンの脱分極化による電気的な発火現象である。化学的現象に過ぎない。そこには人間が期待する本質的な理解も解釈もロジックも説明も倫理すらもない。ただの物的な現象だ。ただ、わかったという感情が醸されている丈だ。ドーパミンでも分泌されるのかな。

まあ、ともかくも、心理的、いや、生理的な、ケミカルな反応、機械的、化学的な現象に過ぎない。実感されるものは単なる納得という感じがあるという丈だ。そこは荒野のように何も無い。ナミブだ。

意味と定義が定かではないという以前に、意味と定義という設定、それを設けたコンセプトの妥当性が定かではない。意味と定義とが何のことだかも、実際には全くわかっていない。

そんな為体で、それがどうして事実の捉えになるのか。科学的な証明などと、笑止。

そもそも、小生らの観察は正しいのか？ 小生らは事実を見ているのか？ 観察とは何か？ 事実とは何のことか？

「そんな」

「ま、それを言えば、多くの人が莫迦ぐしくて現実離れしていると考えられるかもしれないが、小生の言うところの方が、衆人の言うところの科学的な知見によく合致し、彼らの生活感覚こそが彼らに常識として知られている知識に大いに反している。全く矛盾し、異逆している。愚昧この上ない。」

まあ、来たまえ」

「どちらへ」

「眞神の聖地、眞神の大御社さ」

墓地所を出ると、叭羅蜜斗くんが大きくて頑丈そうな車で待っていた。彼の家だからい

て当然だが、僕は驚いた。何もかも準備してあったようだ。

「俺の車だ、乗りな」

装甲車のようにデコレーションされたアメリカン・フルサイズのダッチ・バンに深く坐り、ただ、田園風景が過ぎ去って逝くのを眺める。田んぼの尽きたところで舗装路も尽き、林道のような轍を辿って樹木の繁った岡を登った。溪谷に沿った隘路は車のすれ違いがでないどころか、轍の凸凹で横揺れするアメリカン・フルサイズのごつい車幅がはみ出しそうである。

異様な岩山が見えて来た。太い巖でできた立方体、極太の角柱のような漆黒の山だ。少しの松木以外には草木がほとんどなかった。アルファベットの大文字のⅠを潰して極太にしたような見映えでもある。太いから、ローマ数字のⅡにも見えなくもない。真兮くんが見上げながら言う、

「さあ、ここさ。今、この瞬、まさにね」

降りると、柔らかい草と凸凹した硬い土で、足場がよくない。

「着いたんですね。ここですか、この岩山。まるで、人工のオブジェみたいだ」

この轍に蛇皮のブーツでも、真兮くんは気にならないようであった。指でモノクルを直す。

「これが聖なる真神山だ。真神の大御社は、この山の垂直の壁の中腹に廻廊を廻らせている。環のようにね。丸くはない、四角だが。実際には、山と言うよりかは、一個の巨石（まあ、岩か、巖などと言ってもよいが、それらの違いが、小生の知る限りでは定かではない）さ。まるで、立方体、四角い寸胴（いや、良い喻えじゃないな。寸胴と言えば、普通は円筒形だ）、角柱のようである。方形の巨石が垂直に聳えるさまは、ビルディングに喻えられる。

ちなみに、垂直の岩壁の面の全ては東西南北に対して垂直になっているんだ。むろん、自然にね」

石。一個の石。僕は瞼の開閉を繰り返し、何度も見直す。第一印象がアルファベットの（極太の）大文字のⅠであったが、見れば見るほど、Ⅰ（又は、ローマ数字のⅡ）にしか見えなかった。

それは凄まじいまでの威厳を湛えている。その荘厳は地響きのように大地を激震し、天穹に鳴り渡るかのようなであった。崇高さは途方もなく、その聖の聖なる神聖さは恐ろしいほどに儼然と聳え、人間を原罪の意識で根源から怯えさせ、神の偉大さに畏怖させる。

存在が放つ巨大さは大宇宙をも壓倒、凌駕するかのようであった。あたかも、眼前に太陽神アメン・ラーが燦然とあらわれたかのようであった。夜陰も日影もなく遍照なる絶対性のある太陽で在る大毘盧遮那佛の太炸輝の眩さが網膜を刺すかのような錯覚を観ずる。きよあけくさやかなる燦めきの太陽の女神が天空を超えて、すうっと立ちあらわれるかのようであった。

存在が言葉にも概念にもならぬ無数の言語を以て、思惟・思考や諸考概を収まらぬ氾濫を起こす。壓倒であった。

存在は摩訶不思議だ。いったい、何であろうか。わかりようがない。わかり方がない。わかるとは何か。わかったから何だと言うのか。真兮くんと出会って以来、僕のなかで繰り返される問いだ。だが、虚しい。まるで、ナミブの沙漠だ。無すらもない。だから、存在なのか。何もわからない。摩訶不思議でしかない。喩えようもない、妙義としか言いようがない。

思惟を超えた睿智というものが存、甚深微妙で、妙法白蓮華のごとくであり、實在が超狂裂の末であることを直截に思い知らされた。

頂上はほぼ水平であった。まさしく立方体なのだ。垂直に屹立する黒い巨石の天辺には、眞神の御山を縦に短くしたようなかたちのものが載っている。それも石（又は、岩か、巖）であるが、下から見る限りは「屋上」の面積のほとんどを占有し、かつ、東方向にはみ出していた。しかし、かたちが似ているとは言え、眞神が垂直と水平と直角とで構成されている人工物のようなかたちであるに比し、純粹に自然石っぽく、尖った起伏や鋭い凹凸、又亀裂などがあつた。直線と不規則な自然の線とが組み合わされている。

僕には、唐突に、山全体が漢字の「彡」として幻視された。頂上にある、自然形の石が偏旁の「亅」、又は「ㄣ」（けいがしら、いのこがしら）に見える。尤も、漢字の亅は横にずれて右にはみ出したりはしていないが。

まあ、素直に単純素朴に脳裡に映えるがまま、物的に見るなら、印象どおり立方体のよくな太いアルファベット大文字のIであるが。

僕のこんな想いを察しているかのように真兮くんが、

「ちょうど、頂上に巨大な磐代（神の依代）が載っているのが見えるであろう。眞神山が変形したかのようなかたちをしているものが」

「では、あれが」

僕は思わず言った。真兮くんがうなずき、

「イタルが究極最後のパフォーマンスを演じたステージさ。古代の眞神の神聖な祭祀の場だ」

僕は震えた。あそこが彼の死んだ場所なのだ。炎となって炸裂した場所だ。常軌を逸している。炸裂、まさに狂ったかのように奔放な炸裂だ。現実的にも、概念的にも、存在としても、現実存在にあっても。僕は真分くんのさり気ない言葉に対して、何も応えられなかった。ただ、山は儼然と聳える。一つの石であるその山は。存在である。

僕らの生も死も無みするかのように。それが唐突に、異様で、底知れぬ非情性を以て僕らを壓し、無感情に無表情な睥睨をする存在に見えてきた。

高さは麓から、つまり、地上露出部分からは、高さ百十四メートルらしい。ちなみに、周囲は凡そ四百メートルで、一辺が約百メートルとのことだ。海拔で言えば、さらに百か、百数メートルは高いのであろう。その上に立つ磐代も、高さは四十四メートル。縦横百二十メートル。御山と磐代との総高は百五十八メートル。彼はあの四十メートル以上の高さから飛んで、眞神の頂上に墜ちて死したのだ。古代の祭祀が行われた場所で。

震えが止まらない。何か恐ろしいものを見てしまったかのように。

現実的に考えても、もし、勢いが余って、さらに下に墜ちていたら。あり得なくない。『屋上』の面積は狭い。一辺が百メートル四方の正方形のうち、控えめに言っても、五分の四くらいを磐代が占めている。実際、東側が『屋上』から、大きくはみ出したりしていることを考えれば、磐代の面積的な大きさは『屋上』の面積以上だ。

麓は激しい溪流で、山に当たって一旦、二つに分かれ、廻ってまた合流している。飛沫を上げる怒濤は岩に砕け、轟音で場を裂いていた。

叭羅蜜斗くんが言う、

「あの中腹に見えるのが眞神の大御社、眞神神社だぜ」

石の壁面をぐりと廻るように神社の廻廊が附築されている。奇観だ。帯のようだ。又は裳階のある胴巻き（そんなものが存在するはずもないが）に見えなくもない。

聖域を囲む環濠のようにも見える溪流には。粗野な石造りの太鼓橋が架けられていた。欄干の初めの一柱に『波羅蜜』と彫ってあった。風雪に磨られ、相当古いものと感じられる。

波羅蜜はパーラミーター。サンスクリット語で、意味は到彼岸。彼岸に至る。つまり、此岸（この世）を超越して向こうの世界、悟りの世界、解脱の世界に逝くということだ。なるほど、激流を渡る橋に相応しい。

「西暦で言えば、二八七年に竣工した。それまでは木製でね。彝之魁偉太朗という巨軀の男が氏子にいて、橋が壊れたから石にしたと伝えられているが、ちよつと眉唾物っぽいからね。身の丈が三丈（約九百九センチメートル）、体重四千貫（約一万五千キログラム）ということだから。アフリカ象よりも大きい。超豪傑だった、って話さ」

そう言つて笑つた。

僕はそれよりもこれから逝く先をみて、血の気が引く。橋を涉つた先は棧道であつた。垂直の石の壁に、直角に刺した丸太や石材をステンレスのような金属で補強してできている。僕は恐る恐る幅百五十センチメートルほどの棧道を登つた。冷や冷やする。彝之魁偉太朗は『波羅蜜』橋よりも、よほどこっちの方が逝けぬと思うが、やはり、伝承は民話にありがちな誇張か。

「実は旧式の外附エレベーターがなくもないが、正統派はここを登るのが常だ。最も上古は岩をよじ登つたという説もある」

いずれにしろ、信じ難い。

「命懸けですね」

「昔はな。経験は大事だ。どんな言葉よりも叡智を鍛える。現実でしかわからない、真の叡智をな」

と言ひ、僕の後ろの叭羅蜜斗くんがさも愉快そうに笑う。そこで僕は経験知という言葉を出した。経験知とは、日常では経験してその知識があることなどを言うが、もともとの哲学術語の意味はそうではなくて、経験でしか理解し得ない知識のことだ、たとえば、自転車の乗り方などのように、知識や考概で得ても意味がない、経験でコツを覚えるしかない類の知のことだ。密教の身口意の三密も、それと繋がっているかもしれない。

欄干は棧を斜め四十五度で支えるステンレスのような金属と直結した金属で、漆のように黒く塗られ、彫りや装飾があつた。しかし、僕はその欄干には近づかず、壁面に縋るやうに逝く。掌で触れながら、沁みぐと見れば、岩肌には味わいがある。粗く嶮しくも深く、儼しくも複雑な精緻さを持つ。知性をも感じた。言語ならぬさまざまな情報が怒濤のように伝わる。大して歩かないのに疲れた。

「だいぶ苦しそうだな、土埃くん。少し休むかね？」

彼が指差すところを見れば、窪みが穿たれ、石の椅子がある。椅子は置いて在るのではなく、彫られていた。

「こういう休憩場がこの先にも、いくつかある。気楽に行こう。」

人類は狩猟から農耕に移行する過程で、安定を得た代わりに自由や勇壮を失った。農耕は朝から晩まで、毎日、みっちり仕事がある。効率的な方が良い。狩猟生活は違う。過酷な時に氣を集中するが、獲物さえ得られればそれ以上はない。戦いは常に氣宇を鼓舞し、誇りや勇氣が試された。荒まじくはあったがね。

まあ、そういうことで、少しずつ解放されながら、ゆつくりと逝こうか」

すると、窪みの奥の陰から、

「やあ、来たね」

普簫くんが幽玄と坐っていた。

「ようこそ、土埃くん、さあ、休んでいきたまえ。僕はね、もう体力がないから、この先を考えて、大いに休んでいくよ。」

のんびり休む、それがいいさ。悠々と流れる雲のようにね、天地自然と一体となつてね。あくせくするなんて莫迦ぐ／＼しい」

暗かったので、ライブの時と同じ服装に見えた。やはりあれは衣装ではなかったんだ、と思った。

「ふむ、ふむ」

真兮くんがパイプを出す。キャラバツシュパイプだった。昔、劇場の俳優がシャーロック・ホームズ役の時に使ったアイテムだ。

「そうするか、さあ、土埃くん、小生らも坐ってみないか。一望できる」

そう言つて坐り、メシヤム（海泡石）の火皿に煙草の葉を詰めることもなく、ただ、啜えた。僕も坐る。良い心地だった。開放的な光景だ。それが第一印象、ところが死への畏怖から解放された。刈り終えた田んぼと丘陵と山脈と蒼穹。素朴な景色だ。秋をしみじみ想う。中枢にある広い田は畦道を碁盤の目のように整然と配するも、その末端は複雑な形状の丘陵地帯の谷へ深く入り込んでいる。何でもないようできて、吸い込まれるように心地よかった。涼やかな風が額の汗を乾かす。絶景だ。

古来、明媚なる良き風景には、神がいる（もしくは神性がある。同じことだが）と信じられ、災禍を蒙ることのないよう、歌を奉じて荒御魂（あらみたま）（いや、和御魂（にぎみたま）であっても）を慰撫したと聞く。今日的な、良き景色によって感興し、歌でも吟じようかということとは全く違っていた。歌には祭祀的、古くは、呪術的な意味があつて、それが生活に密着していた。

道殣者を悼む歌も、怨霊にならぬよう鎮魂するのである。

僕は理を超えておのずと観取し、感得した。神聖な氣持ちになる。

山や岡に囲まれた真神の水田は、恐らくは古代には入江だったのだろう。一万九千年前、北米や欧州北部の氷床が融解を始め、海面が上昇し、日本では約七千年前に海面が今より百メートルくらい高くなっていた。その後、増大した海水の重みで海洋底が沈み、マントルが陸側に移動して陸が隆起し、海は後退したように見える現象となる。縄文海進と呼ばれるこの現象は氷床から遠く離れたところでしか見られない現象で、氷床のあった地域では逆に氷床の重みがなくなり、陸が隆起していた。

地球の鼓動を感じる。あるいは、神の崇高か。

蒼穹を見上げれば、それは鼓動に応じるかのように鳴響し、どこまでも青く、どこまでも無際限に拡がり続けていた。自由、神のように無限なる自由、狂気にも近い、超越をも超越する自由、空気のように、世界に遍満する。

「扱、逝こうか。普簫くんはもう少し休むか？」

「あゝ、そうするよ。きよらかな風だ。急ぐのは体に悪いね。魂を瑕つける。何事も閑静に、細やかに逝きたいね。寂莫に。まあ、すぐ追いつくさ」

僕らは再び歩き出す。しかし、早くも再びバテてきた。普簫くんの休む意味がわかった。意外に体力ある真兮くん。ソクラテスもそうだったらいいが。僕は息も荒くなり、風は乾いて涼しいが、体が熱くて、汗が流れた。初秋のこの辺りは結構、寒いが。少し休もうかと言いつけた時、

「一の鳥居さ」

真兮くんが指差す。顔を上げた。鳥居だ。素材は黒い石のようだが、なめらかと言うか、きめが細かい。

真兮くんが言う。

「讃岐岩だ。非常に緻密で、固い。叩いてみたまえ、高く澄んだ音がするであろう。

さあ、よく見てみたまえ。とても細い流紋がガラスのように光っているのがわかるかな。黒曜石が象嵌されているのだ」

「凄い、見たことがない」

僕は美しさに恍惚とした。全体に明神鳥居のようだが、彫りや造作があり、繁縷だ。流紋も彫も黒くて目立たないが。インド古代の仏教門トーラナや中華の牌楼を聯想させる。それでいて日本の肅たる清楚な佇まいを見せていた。

扁額には『裂』とある。こういう場に掲げる文字としては、非常に珍しいものであった。聞いたこともない。真兮くんに尋ねると、

「ま、小生らが民の独自の、ある意味、術語みたいなものかも知れないな。

意味は、読んで字のとおりだ。その趣は、躬らを超越し、躬らを裂き超える、ある種の狂気、掟を破って禁制を超え、定めを、定義を超え、かたちを超えて、自由に、新たな地平へ、無限の彼方へ、無際限に狂って裂く、狂ったように牽き裂く。狂い咲く。そうさ、裂くは咲くに通ず。又は幸さいに通ずるのだ。

真幸まさいくあれ。ただ、その幸せは普通の幸せではない。

いかなるものや、いかなることに囚こわれぬ。世俗の価値観に囚こわれぬ、事実上の無空、無空にも囚こわれぬ絶空、寂滅じやくめつ為樂ついうらくすることさ」

絶空？ それもあまり（いや、全く）聞かない言葉だ。

「それも眞神独自の言葉ですか」

「絶空のことかな？ そうだね」

「それって、まさか」

僕の頭に唐突に、それが啓き閃いたので、

「イタルくんは、それを」

叭羅蜜斗くんが鼻尖で、音を立てずにへツと笑った。真兮くんは静かに微笑んだ。僕も何もそれ以上は言わず、いや、言えなかった。

何か、とても怖くて。又、恐れ畏かしこみて、近づき難くもあった。

世の価値を超える。それは親の悲嘆も顧みなかったということか。僕は釈迦の弟子で、幼い子と若い妻とを顧みずに捨てて出家した青年のエピソードを思い出した。釈迦がそれを賞讃するエピソードだ。確かに、出家とは本来、そういうことであつた。

栈道をさらに逝くと、中途に唐の時代を思わせる四阿（東屋）のようなものがあつた。そこを潜らないと進めない。

「手水だよ」

水盤があり、龍頭が三つならんで水が垂れていた。手を清め、口を漱ぎ、笏に水を注いだ。心身を齋いみじた。儼肅なる儀式だ。

「下の溪流から水圧で、ここまで上げているんだ。古代からある給水のための絡繰りで、二千年近く変わっていない」

溪流から二十メートルくらいか。

「さっきから伺っていると、日本の歴史とかなり懸け離れているようですが」

「むろんだ。もともとは異民族だから。眞神族は二千七百年前に日本に上陸した」

「すみません、途方もなくて理解不能です」

「諄々に話すよ。まあ、まずはご覧あれ、百聞は一見にしかず、さ」

二の鳥居が見えてきた。

扁額には『天網恢恢』とある。

「天網恢恢疎にして漏らさず。老子の言葉だったように記憶しています」

「これは二千五百年前に彝之奕仁ヤクニが崑崙山で太上老君から直々聞いた言葉と伝わっている」

「本当ですか」

冗談かと思う。そう思うのが普通であろう。僕は真兮くんの顔を見た。叭羅蜜斗くんが金髪スパイキーを掻きつつ、

「嘘みたいだろ？　へへっ」と言う。

「どっちなんですか」

「まあ、一応、本当ではあるが、所詮、現象だからなあ」

真兮くんがどちらとも受け取れる言い方をする。曖昧と言うよりは両義的な。

何だか、狂人たちの集団妄想につき合っているかのような、疑惑と不安の気持ちが太いに擡げてきたが、真兮くんを信じたい気持ちも強くあり、じぶんでもわからないまま、考え考え、

「現象だからって、いったい。」

つまり、それって、五蘊（色・受・想・行・識）だからと言うことですか」

人はじぶんが欲しい答を勝手に想い込むものである。

「五蘊か」

真兮くんは、ちょっと違うなあ、とも読み取れる表情を醸す。

僕は有名な經典を思い浮かべていた。仏教徒の間では宗派を超えて誦される短い經典。『色空　空是色　色不異空　空不異色　色即是空　空即是色』が一番知られているが、僕にはさらに興味深い聖句がある。ちなみに、最初の『色空　空是色』は玄奘の翻訳では省略されているが、サンスクリット語の原本には記され、鳩摩羅什訳などには翻出されている。

照見五蘊皆空。

この聖なる句だ。照見とは事実・本質を叡かに見ること。般若波羅蜜多心経の一節であ

る。色は受（感受）の原因となる因子のこと、受は色を感受する感受作用、想は感受による表象作用、行は表象したものを構築する作用（諸行無常の「行」である）、識は構築されたものを物事とする認識作用（「物事それじたい」）だ。

「世界は五蘊というと、君はどう感じるかね」

「どうって言う」と

「感覚作用や知覚作用が世界を構成すると言うことは、現象学的には自明なことのように見えるであろう」

「現象学、フッサールの現象学のことですか」

「そう。何かが在って、感受が起こると普通の人々は考える。しかし、感受する者の本来の立場から言えば、実際には、そうではない。人は（人に限らないが）現象が起こって、その起因である感受作用があると知り、感受があるからには感受の起因となる外的な実在物があるはずだと、経験的に推論しているのだ。」

ちなみに、感受した信号を現象として構築するフォース（力・構成力）又はアルケー（原理、又は棟梁）をロゴスという。仏教的に言えば、法（ダンマ）というところか。いずれにせよ、実際には、わかったという気分を醸成・捏造しているに過ぎない」

真弓くんは冷ややかに微笑み、言葉を継ぐ、

「小生ら眞神の伝統的解釈は現象学とは、似て非なるものだ。五蘊の考えもまた、現象学とは異なる。」

小生らの考えは以前にも示したが、意識やところを内的な作用とはせず、それが客観的な実在であるとしているというものであるが、同じ話をしてもし方があるまい、今は端折るとするよ」

僕はまだ頭に馴染まなかった。

「いや、確かにそのお話は以前にも伺いましたが、未だによくわかりません。僕は従来、全て存在するものは人の感受や知覚に基づく認識作用から創り出されていると考えていました。」

色彩がよい例です。色彩は存在しないけど、光の波の長短を視覚が感受して脳髓で解釈し、色彩として構築、すなわち、一定ルールで創作している。実際に色彩は存在しない。ただ、物質によって吸収しやすい波長や乱反射させやすい波長がある丈で、乱反射した波長の光線がその物質の色彩として構築される。緑の葉は特定の波長の光を反射させ、人はその波長を網膜で捉えて緑として解釈して緑色を観る」

「音も匂いも味も触覚も原理は皆同じで、それとしては物的に存在しない。まあ、そういう理解でもよい。理解なんて大した違いじゃない。所詮、考概だし、インパルス（神経細胞内で発生する電気的な発火現象）に過ぎない。ケミカルな現象でしかない。無味乾燥、無色透明だ」

「そういう理解でもよいとは。それも正しいということですか。他の理解も正しいけれども、それも正しいという」

「まあね。空と空とに差異はない。崑崙山のエピソードも実在しない」

「そんなことを言ったら、何もかも」

「むろんさ」

「では、感受や感覚作用や知覚作用や認識作用（これらは僕らにとって実存です）の起因となっている存在が実在は存在ではない、と」

「ふ。君は空を何とこころ得る？」

「空、空をですか。難しいです」

「ふむ、そうだろうね、たとえば、僧侶である君であっても」

「はい。しかし、今は還俗してしまい……」

「しかし、学んだはずだ。それに、沙門であるということは、制度ではない。こころのあり方だ。志だ」

「体験でしか知り得ない。そう思っています。禅宗の教えでは、『不立文字、教外別伝、直指人心、見性成佛（言葉によらず、經典の別に伝えられる。人心と仏とは同じで、それを直截導き、自己の仏性を見出して解脱する）』が基本です」

「ごもつとも。だが、だからこそだ。敢えて、口先丈で言い切って構わないのさ。ふ。さあ、空とは、何かね」

僕は落ち着こうとして眉間に指を当てた。作麼生・説破のときのような緊張が奔る。

「言語的には、サンスクリット語のシューニヤ（舜若、*śūnya*）です。意味は『零』です。欠如、缺を表し、〇〇がないことを意味します。

物的に存在がないこと丈でなく、抽象的な概念であっても、その存在がないことを意味します。

かたがない、特性がない、など。

僕はあなたから、かたがないということの凄さと現実性を教わりました。空にかたがないとわかつてはいたのに、惟いが至っていませんでした。

かたちがない、って、凄いです。無も、空も、考えのなかに在るときは、一つのかたちですから。かたちがないってことは、いかなる考概が画く輪郭のうちにも収まらないということです。むろん、今述べているこういう考概にも、です。

どんな結論も遂げられない、どんな想いにも着地していない。それって、想い描けないということ、想い描けないと想ってもダメです。そして、だからこそ、それが現実である、と」

「ところで、君、土埃くん、還俗したんだよね。何と呼べばよいかな？」

「はい。俗名、つまり、世俗の本名ですが、草葉あきらです」

「そうか。草葉くん、では、天網恢々の意味を言いたまえ」

「えーと、確か、天の網は、ゆったりのびのびひろやかで、網目も疎ら。粗い（大雑把）ようにも見えるが、精緻細密で何一つ漏らさない。天羅地網、悪事を逃さない、天罰覲面みたいなニュアンスを含む意味でしたよね」

「然り。然り。」

何一つ漏らさないって、どういうかたちならば、そうなるのであろうか。わかるかね」

「かたち？」

「そうか、かたちがあつては、かたちが合わないものができてしまう」

「そのとおり。そのとおりなんだが、それは、君が言ったとおり、なかなか得難い概念だ。普通の理解では至れない。かたちがないということもまた、一つのかたちを形成してしまうから。」

全てを網羅して餘すところがない、ということとは、論理的に（そう、飽くまでも論理上なんだが）大いなる矛盾を生む。矛盾しなくしては成り立ち得ない。とは言え、矛盾ということじたいが論理（という措定^{かりおき}されたもの）に遵って、捏ねて造る拵えものでしかないのだがね。

事物であると事象であるを問わず、抽象概念であろうと、何であろうと例外なく、全てを網羅する、としよう。全てとは、むろん、一切全てだ。何もかもだ。何であろうとも、どれもこれも、考えられることも、考えられぬことも、見境もなく、禁忌もなく、だ。ありとしあらゆるものやこと、なきとしなからんものやこと、それら一切全て何もかもを超えて、一切全て何もかもだ。一切全て何もかもではないということをも含めて一切全て何もかもだ。

全てを網羅し、もはやそれそのものとなって異叛違互がない、畢竟、肯定とも言える。

異叛違互がない全肯定だ。全てと齊しい。全肯定ではないという状態であることも、このことと異叛違互しない。全齊ではないという状態になっても、異叛違互ではない。全否定や、一部の否定や、一部肯定である状態にあることも、矛盾にはならない。かたちがないということは、そういうことだ。論理上はね。

そう、飽くまでも論理上のこと。論理という、指定された球体の内部丈で、堂々廻りをする戯れに過ぎない。『善』の説明は『善い』であり、『善い』の説明が『善』であるというように。虚しい設定上のことだ。指定。仮。捏造。架空。全く解決のない零だ。どうしたって、空疎にならざるを得ない。どうしたって、同義反復 (tautologia トートロジー) になる。どうしても、どこかを端折る、どこかを無条件で是認して前提としなければならなくなるからだ。どうしても、臆断になる。誤魔化しが残る。

零から証明することが不可能だからだ。どうしても最初の一步は無条件に証明なしでは認された前提が必要になる。それがないと足掛かりがない。出発できない。純粹に論理丈で構築された完全証明は (根拠は不明だが) 実際問題として、ない。

結局、未遂不収のままさ。李朝の普段使いの茶碗の侘び、枯葉を濡らす雨の秋の午後の寂び」

「李朝の茶碗……」

いや、いや、まだまだ、理解できません。言っていることは、一応、わかりますが、感覚に馴染まない、って言うのか、つまり……、その。

腑に落ちるような安心はありません。人は理によってものを解しているのではなく、経験によって感覚に磨り込み馴染ませ、納得という感情を醸している丈であることがよくわかります。

こんなじぶんの状態をよく閱してみれば、確かに、考概による概念もまた、決して本質あるものなどではなく、風雨や、干潮や、(あなたが先ほど言った) 化学的な発火現象であるインパルスや、食物を消化する酵素の作用のような、天然自然の現象であることがわかります。経験的に感じ取ることができます。物的な存在であることが何とはなくわかります」

と言いながら次に向かって進む。歩きながらも、僕は想った、でも、生活に支障はない、と。だから、人は皆、眼を逸らし、忘却する。日々忙しく、生きるに精一杯。仕方がない。それが現実を生きているということだ。

三の鳥居が見えてきた。シンプルな木造の鳥居だ。無垢で凜としていた。僕は感嘆し、

思わず言う、

「何だか清々しいですね」

清浄なる空気が流れていた。空気の変化は高さのせいか。きよらかであるということには、深い意味があり、概念にならぬ哲学がある。思考ではない真理がある。聖なることを感じた。聖なる力によって齋戒されたかのごとく、さやかで神聖な気持ちが高まる。扁額はないけれども、最も崇高な文字の刻まれた扁額があるかのように感じられた。さらに隘路を進む。

棧道は古くてところどころ欠けた石段に変わり、岩壁に張りつくような楼門があらわれた。深淵のように昏く美しく奥深く濃い緋なのに、眼が痛くなるほど烈しく鮮やかで眩い、楼門。

壁龕のような洞に大御社はあるのだ。楼門の幅は十メートル、高さは幅の倍はある。両脇から壁が始まっている。壁の高さは五メートルくらい。その上には瓦屋根があり、廻廊をなしているようであった。

楼門の扁額には蛇の意匠がある。

躬らの尾を嚙む蛇。原蛇ウロボロス。躬らをすらも喰らい尽くす蛇。喰らい尽くせるのか。少なくとも、僕らの三次元空間では、そんな動きは不可能だ。

もしかしたら、四次元の空間ならば、可能なのか。五次元、六次元ならもっと可能なのか。空間の次元数が増えるということは、運動することが可能な方向が（現在、僕らがいる三次元では左右・前後・上下という三つ）増える、ということだ。運動方向が増えれば可能かもしれない。

だが、もしも、可能だとした場合、喰らい尽くす蛇は喰らわれ尽くされて喰らうことができたのか、できなかったならば、喰らわれ尽くされずに喰らい尽くせるのか。

わからない。僕らの思考は空間の次元数に制限されている事実を感じた。純粹な論理は無条件な零から出発するのが論理的には理想だが、それは不可能だ。

そもそも、概念の全て、考概することの全てが臆断や思い込みではないか。純粹ではない。でも、なぜ、純粹論理でなければならない？

僕は再び見上げた。事象に還ろう。事実には。

一色しかない、その壮麗な門の左右は廻廊で、瓦屋根や裳階がついている。これが帯、又は胴巻のように見えていたのだ。一辺が百メートルだから、楼門の幅を除くと、左右のそれぞれが四十五メートル先で直角に折れているはずであった。その全てが濃厚であるが

鮮烈なる唐紅に塗られている。大動脈からあふれる深い緋色を聯想させ、生命を思わせる。聖なる靈妙を。八卦における乾、陽の極致を。

「古伝によれば、深く濃く鮮やかな赤（又は唐紅、又は緋色）は陽の極致でありながら、強烈が過ぎて、苛烈過ぎ、畢竟、非を意味する。奇しくも緋も非も大和では同じ音を用いる」

真弓くんが誰に言うともなく、言った。進む。

「え」

くぐると、眼の前は、またもや門であった。ストーンヘンジのような巨石柱の列。しかも、白堊のように白い石だ。タブラ・ラーサ（ラテン語 *tabularasa*）。白紙の状態。ほぼ、自然石のようであった。

なぜか僕はその真白を見るうちに、見えるということに眩暈を覚える。

ものが見える時、僕らはものが在って、在るそれを視ることによって、脳裡にその映像が浮かぶと考えている。しかし、実際の順序は逆である。すなわち、僕らの「視る」があって映像が結ばれるから、恐らくはそこに実在があるのであろうと推定している。そういう捉え方が直截だ。

だが、僕らはじぶんの視覚作用の過程を観察しているわけではない。視認をする時、実際にじぶんが何をやっているかは見えていない。視ることができないのは当然だ。三次元世界では、眼は眼を見ない。物理的に不可能だ。不可能だからだ。

だから、僕らが「視る」は推定でしかない。他人が見ている姿を見て、じぶんも同じくそのようにしているのであろうと推定するが、それを見ているじぶんの「視る」が確認・確定できていないのだから話にならない。全ての観察は不確かでしかない。

じぶんという主体の不確かさでもある。

そんな不安を煽るように、白堊の石の門の上に、唯一の人工作物と言える扁額があつて、墨跡があるが、読めない。文字であるかさえわからない。

真弓くんたちのコメントもなかった。無記なのか。記別せざる、……か。僕は周囲を見遣る。洞内の高さも深さもかなりあることがわかった。

「これは、社と言うか、石器時代の神域に來たみたいだ」

よく観ると洞窟の天井とも言ふべき壁面が頭上に見えるが、アルタミラ洞窟のような壁画が見える。

白い自然石柱の門を過ぎると、また門が。

煉瓦積みの濃くて鮮やかな青。古代エジプトで神聖視された瑠璃（ラピスラズリ）のような青。建築様式としては素材も含め、バビロニアの青き門のようだった。熱砂の国の聖なる青。

「さあ、この先はさらに見慣れない光景かも知れない」

真兮くんが言うと、叭羅蜜斗くんがへっつと笑う。僕はこれ以上どんな驚きがあり得るのかと思った。だが。

「本当ですか、いったい。え？」

図らずも立ち止まってしまった。

それは逆の驚きである。何でもない木造の御社であった。無垢の檜か。白く見えた。屋根は檜皮葺。全体に拝殿・幣殿・本殿のある香椎宮を思わせたが、勅使が来るはずもないので、幣殿に見える部分も拝殿なのであろう。

本殿は二階建てで、浅間造を聯想させた。一階の屋根は左右が切妻、正面が入母屋だが、入母屋の下から流造ふうに檜皮葺の屋根が伸び、それがとても長く、最初は急角度で下がつて、途中から水平になり、最末端で反り返り、長さと言い、かたちと言い、見たことがない様式であった。屋根が降下する角度から、又それが水平になる位置から、本殿の床が高い位置にあり、そこへ上がる階が急であることが察せられた。

また、幣殿のように見える拝殿の左右から透塀が始まっている。それは本殿を囲っていた。

「止まっても仕様がな。逝くぜ」

叭羅蜜斗くんの言葉で一步踏み込む。見上げれば、手前の拝殿には、またもや読めない文字の扁額が掲げられていた。

真兮くんが言う、

「眞神文字さ。眞神語だ」

幾何学的だが、藁筆で強く捏ね捻り込むように押し叩きつけられ、四画に見えた。荒巖のようであった。

僕は問う、

「何て書いてあるのでしょうか」

叭羅蜜斗くんも、

「日本語にはな、該当する言葉がないだろーぜ」

思わせ振りの言葉で、僕には、疑問が残る丈であった。思惟思考は遂げられず、不安の

情も、居場所を求めるころも、智慧への飢餓も、宙ぶらりんのまま、いずこへも収まらない、いずれのかたちにも収まらないままになる。今思えば、そういう言葉が書かれていたのかもしれない。

喩えて言うならば、『存在』だ。どんな考概でもない。説明でも言葉でも解釈でもない、ならない。唐突で、遠慮会釈のない者たち。別の言い方をすれば、『現実』かもしれない。言葉を寄せつけず、どんな言葉も概念も追いつかない。経緯もない、ただ、唐突に。だから、かたちがない。

だから、木造の御社なのであろうか。そう思った瞬間、途方もない巨大な宇宙のような空間に抛擲された。東西も、上下左右も、中央もこれも、ない。呼吸ができない。イオニアの瞳孔の水晶体のように無限に透明な純粹だ。生存が絶滅するかのような純粹過ぎる純粹。気を失いそうになった、魂を篡奪されそうになった。もしも、その時、真兮くんが声を掛けてくれなかったら。

「さあ、上がろう。社殿は社殿、小生らは小生らだ。気にしても、考え抜いても何もならぬ。階を踏もう。昇殿しよう。雲上へ。天へ。聖の聖なる至極の高みへ」

我を取り戻しながらも、僕は戸惑う。

「え、今はとても……。あ、いいえ、何だか。いや、それに、ここは神聖なる極み、善いのですか、聖域中の聖域では」

「むろんだ。むろん、聖域だが、実際、構わんよ。全てを齊として肯んずるのさ。眞神の大御社の祭神は、一切を潔きよむ」

階を上がる。床は無垢の木、かたちは方丈。四隅の柱があり、手前右が南東の柱、左が南西の柱、奥右が北東の柱、左が北西。北東と北西に櫛が奉られている。

真兮くんが正坐して礼拝したのでそれに倣った。叭羅蜜斗くんは胡座で礼拝し、

「奥拝殿へ進もうぜ」

そう言った。

なるほど、奥拝殿と言うのか。あまり聞かない言葉だが。これも眞神マコト独自か。

一度、方丈を廻る回廊へ再び出た。それから左側の廊下を（右回り方向に11半時計回りに）進む。なぜ、そうするのか、それはわからないが、作法の理由というものは小賢しく頭で考えるよりは、経験で体得すべきであろう。体験で知るべきであろう。思惟はあまりに限定的だから。より自由になるために。そんなことが自然と考えられるようになっていた。

正面に至って、三段の階を上がった。

奥拝殿は檜皮葺屋根の下を壁が囲む。入り口には簾があり、叭羅蜜斗くんが巻き上げる。内に入る。入ると、四方が障壁画である。青龍・白虎・朱雀・玄武だ。僕らは朱雀から入った。ここでも正坐し、礼拝。再び出て、右回りに廻りつつ進む。透塀のうちへ向かった。荘厳な水紋の螺鈿が施された黒漆の階がある。白蓮華の龍神に象られた欄干があった。透塀のうちへ入る。段を上り尽くし、本殿の入口の前に。

扁額には『龍肯』とある。『龍肯』。唐突に漢字？ しかも、これもまた聞かない言葉だ。

真分くんが再び解説。

「君の顔はわかり易いね。小生ら眞神独自の言葉さ。龍神は天空を自在に遊弋する偉大なる神で、大地に漲る氣に龍脈の名が当てられるように、聖なる生命の力の象徴でもある。その龍のごとき、偉大なる、巨大な、聖の聖なる、神なる無際限の肯定という意味さ。

『眞神神統記』の第一書『太祖神』の第一篇『礎』の第一部『彝』の第一章『究竟神』の第一段『清明』の第二節に「太祖イージュは語りて曰く、『清明たれ、龍のごとくに肯ぜよ』とぞ」とある。これに由来しているのさ。

ちなみに、眞神語では、龍肯と書いて、『あい』と読む。『ゐ』は「龍」を顕す。これはあまり大きく言わない。短く小さく言う。その次の『い』という読みは「肯」を顕す聖なる文字の読みがなで、肯定ということなのだが、もっと正確に言えば、言語によって睿らかにされるような意味を持たない。『ゐい』と言うとき、一般に「龍肯」と訳されるのであるが、『い』と単独で使う時は「彝」と表記され、真究竟にして真究極の真実義を顕す」何と応えてよいか。

観音開きの扉があった。左右の扉には、身体を複雑に絡ませる龍の文が浮彫られていた。開く。扉の厚さと重さがわかる。

内は左右と手前の三方が壁だが奥は空いていた。燭の灯で幽かにわかる。洞窟の奥突き当たる先がそのまま見えていた。

「坐したまえ」

真分くんに促され、坐す。正坐だ。

奥窮の洞壁には『彝』と彫られていた。それはなぜか太陽の光燦のようにきよらかに、崇高なる神聖に見えた。僕は、なぜ、真分くんがイオニアのところに来たのかがわかった。これはイオニアの青き燦々の双眸である。嗤われるであろうが、僕は真究竟の真実義とい

うことじたいを直截に拝受したかのように感じた。言葉でも意味でも概念でもなく、物質として臓血骨肉の体で直截に、体験で直截に。僕の禅経験は無駄ではなかったように感じた。

「よお、来たな」

後からぶらりと来たのはべ裂くんだった。相変わらず紺紺に袴、蓬髪を粗く束ねて、脱藩浪士か、風来坊、無頼の浪人ふう。それなのに、精悍な輝かしさ、不思議と燦然たる光背を持った人。それこそが本当の説得なのかもしれない。ふっと尖った鼻先で無音に笑いながら、

「間もなく、普蕭も来る。鳩の足取りでな」

叭羅蜜斗くんが眉を顰め、少し意外そうに、

「お前も登って来たのか」

「最近は、ここに住んでないぜ。不便だしな」

べ裂が嘲るように言い、何のことかわからない僕に、真兮くんが説明してくれる、

「この大御社は彝之家の本家の家屋敷でもあるんだよ。実際、彼らはここに住んでいる。

べ裂くんは本家の跡取りなのさ。第五百二十七代目だ」

僕は呆れ果てた。五百って、何百年か、いや、数千でも済むかどうか。尋ねた。

「五百代って、いくら何でも。何千年も前から続いている、ということですか？ そんな

家系がもしあれば世界最古……」

そこへ、普蕭くんも追いついて来た。「やあ、どうも」と言いながら。燈明の下、近く見ればステージとは違う服だったが、基本型が変わっていない。彼が、

「ところで、唐突に割り込むけれども、そのことについてなら、眞神の者は皆、知っている」

そして、僕は今頃気づく。

「そう言えば、あの岩壁の文字は彝之さんの名字にある字と同じですが」

「そう、彝之家は眞神民族の王家なのさ。

眞神族の奥義を冠する家だ。

祖は初代王、彝玖邇に連なる系譜で、その遠い祖先が太祖イージュ、紀元前五万四千年前に眞神族をまとめたという伝説上の族長にまで繋がる。

王朝が建ったのは紀元前八千年頃（眞神神統記に拠る眞神元年、西暦で言えば紀元前八千七十九年）。

眞神族の古来の最高神の大真義に還るべく、世界を真実の世界へと戻すべく、暗黒と非情と無明の暴激流に筏を泛べ、棹を差すように、こころの機 راきを糺して世界を建築すべく魂を滾らせる、彝玖邇という偉大なる王が現れ、眞神之国を建国した（古代エジプトで集落を作り始めるのが紀元前五千年頃とされる。その原始王時代はさらに紀元前四千二百年以降のことだ）。

なお、眞神之国の場所は特定されていないが、当時は南アフリカから北上し、一説には、現在のチャド共和国あたりと言われている。

彝玖邇の系譜は、彝之家として現代まで続くこととなった。ちなみに、イ（彝）とは聖なるものを顕し、当該する概念がないが、ナミブ※何もない。と同義ともされる」

考えがまとまらず、漠然たるままの疑問が幾つか湧く。しかし、口から出たのは脈絡のない、間の抜けた質問であった。

「ちなみに、ここの御祭神は」

「神の名については、濫りに口にしない慣わしなのだ、ご了承、ご容赦願う次第。

ちなみに、最近の南アフリカでの発掘調査で、その名が古代に於いてどのように頌されていたかが確認された」

「アフリカ？」

「眞神族の起源はアフリカなんだ」

「人類は全てそうだと言われているようですが」

「いや、まあ、そうなんだが、そういう意味ではなく」

普蕭くんの話を要約すると左のような内容であった。

眞神族の発祥は紀元前五万四千年以前に遡る（古代エジプト人の祖先が現在のエチオピア連邦民主共和国、スーダン共和国あたりから移動して来たのが紀元前三万五百年頃、定住が紀元前一万二千年頃と言われる）。文献資料のみで、長い間、伝説の域を出なかったが、最近、南アフリカのナミブ砂漠に近い山岳の洞窟で眞神文字が発見され、その顔料に使われた植物の分布年代と、生贄と思われる動物の遺骸の痕跡から、放射性炭素年代測定により、その年代が確認された。

「で、その時の文字のなかに、神名の記載があったのだ。むろん、今とは異なる古眞神文字で。しかし、エジプト人がヒエログリフを読めなくなってしまったこととは異なり、今でも古眞神文字が読めるのだ。

ただ、その反面、古代の呼び名は口にしないせいもあって忘れられてしまったがね。実

はその後の調査によって、鎌倉時代末くらいまでは、伝承されていて、漢字と仮名文字との混淆による音写の表記があることもわかった。むろん、国内調査でね。（「いや、眞神郡内だろ」と叭羅蜜斗くんが突っ込んで、笑う）

一つの名詞のなかで、漢字と平仮名とを混ぜることはない例ではないが、神名では珍しいのではないか。

ちなみに、眞神族が日本へ涉って王朝を建てたのは、眞神暦7367年の戊辰年甲寅月朔（紀元前713年1月1日）で、第三六六代王、神彝彌眞斗カムイマイトの時代であったが、上陸した以降は、海を渡って頻繁に大陸と交流し、漢字もその際に吸収した。

西暦五八八年、火々禽之柵ホトリノキ（城）タタカの斗いで大和朝廷に敗れて以来、その時代／＼の権力者からさまざまな制約を受けてきたが、源頼朝により、神の真名を奉ずることをいかなるかたちであつてもならぬと禁じられ、以来、約定の信義のため、表記も含めて一切を敢えて亡失したらしい。真義潔白が守られぬならば、人も、国家とても滅ぶ方がましだ。潔き僕ら民族はそう考える。悪法でも法は法だ。約束も然り。ソクラテスだって敢えて毒杯を飲んだ。アテネのために」

僕の方と言えば、普肅くんの話がよく耳に入らないくらい、脳裡でぐるぐると大渦巻が理性の領土領域を逆巻くように席捲していた。

五万年前に遡る歴史って？ しかも、それ以降、恐らくは数万年前、旧石器時代くらいからだと思われる文字の使用……言葉を失っていた。

普肅くんが僕の混乱を読み取って言う、

「まあ、南アフリカで発見されたのは、文字と言うか、象徴、象形文字、聖なる記号だ。御徴みしるしさ。ラスコーやアルタミラの壁画といわゆる文字との間くらいと思えばいいかな。あつちは二万年前のクロマニヨン人らしいが」

全然違う。桁外れだ。もし、本当ならば。

真兮くんが言う、

「さあ、そのくらいにしようか。まもなく、定例の齊会議が始まる」

「齊会議？」

「萬物萬象萬靈萬神が集う大集會議だ。集わぬものとしてない」

何を言っているのか。全く理解できない。

「君も入場が可能だ。ここに来るまでの間に秘儀参入のための儀式、イニシエーションが済んでいるからね。実際、本当の本当には、誰もが参列しているが、三次元しか見えない

から、わからないのだ。解釈上にはないから、意識できない丈だ」

「それも何のことだかわかりません」

「まあ、見たまえ」

真分くんが腕を振り放くように廻し、周囲をぐるりと指差し示す。周りを見てご覧という仕草だが、何も変わっていない。だが、僕は驚愕した。何も変わっていないから、何もかもが全く異なる。それが自由ということなのだと、初めて悟った。全く縛られていないからこそあり得る。矛盾や異互がない。違う、そうじゃない、ということがない。理不尽がない、起こらないことがあり得ない。

物凄い光景だった。

そして、その存在しない大公会堂を埋めつく無数の存在者。途方もない騒音と、大宇宙のような静寂。

「これは、ああ、理解ができないのに、理解が襲って来る」

何十億なんてもんじゃない。何千兆、いや、数限りない。皆言語ならぬ言語を話すが、それが全て通じるのである。犬猫牛馬は、むろん、魚類爬虫類両生類、草木や虫、菌やアメーバや有機分子や火や水や酸素や光やエネルギーや空間や時間や無までも。さらには鬼神や羅刹や魑魅魍魎や神仙や天人や神霊や天使までも。ありとしあらゆる、なきとしならん一切が。凄まじい光景、凄まじい騒然、凄絶な寂莫。にんじんとキャベツが必死に議論していた。

「動物を食うのが可哀想だと言って、我々野菜ばかり食う奴らがいるが、まるで我々には生命や知性がないみたいじゃないか。人間と同じかたちの知性でなければ、知性ではないと思っっている横暴さよ。仮に我らに知性があるのがわからないとしても、我々も生命である。少なくともそれは動物と同じだ。人間と同じだ。

だったら、何も考えないでウサギをただ食う丈の虎の方がまだしも残酷じゃない。菜食主義者どもは我らの生命を否定した上で、さらに喰らう。

我々だって生きているし、思惟も感情も文化もある。彼らに見えない丈だ」

「知性がある（喜怒哀楽がわかる、共感できる、人間と同じ）者たちを殺生するのが哀れという。じぶんたちの価値観が全てだと考える専制君主のような考え、思慮の不足、客観平等の智慧のなさ、じぶんらの常識が全てだと思う愚かさ。つまり、理解できないものに対しては、何をしても善いと考える幼稚な暴力だ」

僕はなるほどと思いつつも、だからと言って何も食べられなくなってしまったては困る。

牛を食ってもいいなら鯨を食ってもいいし、犬を食ってもいいなら人間を食ってもいい。そういう理屈にもなる。いや、全く困った問題だとも思う。解決不能だとも思うのであった。

もしも、知的な生き物は食べてはいけないとするならば、知的な生き物と知的ではない生き物との区分は、どこで線を引くのか。どんな民族も納得し、どんな文化にも受容され、万民が正しいと思える線引きは。あゝ、ヨーロッパ中心主義の植民地支配的暴力よ。人間の多くはじぶんが育った文化や価値観が全体の一部でしかないことを自覚できない愚かな無自覚者だ。

そうこう嘆いているうちにまた、次のような者たちをも見る。すなわち、有史以前に忘れられ、名も遺さぬ尊き古代の霊が、

「我ら崇高な、木や岩や清流や、海や空や月や星々の霊が数えられるものだと思っておる無礼な連中がおるわい。数値化できるは、ただ、物的なもの丈じゃわい。数えられるは、礫や林檎や鳥獣の類」

「それを言うなら、もつと無礼がおるわいな。わしら萬物萬象に遍き自然の霊には異も背くもない。古代自然の霊にして完全無欠なる我らならば、異他也異端も背反・叛逆もないわいな」

「空想とは怖きものかな。それでも、人を争わせ、人を死なす」

しかし、それを聞いていた愉しき森の嘲笑者たちや、大審問官の衣服を着た悪魔たちがせせら笑った。彼らは民衆への阿諛追従者でもあった。

「しかし、それを民の罪とは言えまい。実際、この世は理不尽と異逆と矛盾と非道と悲惨とに満ちあふれているから。民が言うもわからないではない」

どうにもならないことだ。実際、どうにもならなかった。もはや不動・固定の現実の非情性は、全く唐突で、どうにもならない。僕はそう考え、憂鬱になった。

又、不思議な観を呈するのが無の出席である。無は席がない。それが無の出席なのである。つまり、ないところに遍満している。それが無である。何処も彼処も無の席なのである。無のプレゼンス。

そして、それ以上に見たことも聞いたこともない、考えられない在り方の存在者たち。恐らくは全く違う異世界の存在者たちなのだろう。それがどうして見えてしまうのか、不思議でならないのだが、どうにもこうにも言葉にも概念にもできないやり方で見えてしまっているのである。

真兮くんが笑いながら、僕を振り向く。

「どうかね。興味深いことばかりであろう、最初は。そして、人々がいかに偏った考えに縛られているかが、幻を見ているか、現実を知らぬか、思い上がっているかがわかるであろう」

すると、普蕭くんも言う、

「人間は自己中心的だ。超越的ではない。じぶんの感覚や価値観が当然で、かつ、自明だと考えている。癡^{おろ}かだ。自己を超えられないことは癡かさだ。

だから、智慧は大事だ。超越、脱自、自由叛裂、客観性は大事だ。自己超越の果てにある超絶無際限なる客観性こそが悟りの領域だ。

真なる人は解脱、悟りの境涯であるべきである。涅槃を究竟すべきである」

……それはそうだけでも、凡俗の僕らには難しい。それも自然淘汰か？ 僕のような者たちは生き残れない？ 生き残るべきではない？ 滅ぶべき存在か？ 普蕭くんは鋭利、かつ、伶俐だが、それゆえに峻酷でもある。僕は応え、

「想像を絶すとはこのことでしょうか。世界への認識が根底から変わります。確かに、解脱とはこういう経験なのかもしれません。説明できません。思惟不可能、理解が難しいなどというレベルではなく」

普蕭くんが笑いながら真剣に言う、

「理解が難しいのは、意識が制御するからだ。

我らが尾を噛む蛇（躬らを喰らう蛇）を理解し得ない、思い描きし尽くせないのは三次元の空間に生きているからだ。空間を（現実を）どう観るかは意識が制御する。三次元空間での動きしか理解できないのは、意識がそのように限定するからだ。意識が指示する。『ここまでだ！』という限界の表明に他ならない。固定の時間、固定の場所、固定のかたち、固定の名称、固定の概念、固定の固定だ。僕らの意識は三次元空間の思考で閉じられている。

ともかくも、僕らにとって、四次元以上の次元数の空間の世界、又は二次元以上の次元数の時間の世界の在り方は異様に見える。想像を絶するかに思える。

たとえば、君は四次元空間を空想できるかね」

「できそうありません。できそうな気がしないのです。何かが思考や意識を塞ぐかのよう。

三次元の空間は上下左右前後の三本の軸のそれぞれがいずれもその他二つの軸と、直角に交わる座標によって表現される空間ですよ。

四次元の空間は直角に交わる直線軸がさらにもう一つ加わることによって表現される空間ですよね。

運動できる範囲というか、動ける方向が僕らの世界よりも一つ多い世界。僕らの三次元空間の世界よりも動きの選択肢が多い、自由度が高い空間ってことになりますか。ざっくりですが。

球体に閉じ込められた人が球体を破らずに、ヒョイっと外へ出られるような動きが可能な空間、って聞いたことがあります。ですが、僕には想像もつきません」

普簫くんは眉間を人差し指と中指とで抑え、

「思考の型が三次元の空間のパターンで固定されているからね。仕方ないのさ。空想にも描けない。ごもつともだ。

空間の座標軸が一つ増えるということは、君の言うとおり、運動の自由度が増えるということだ。箱を閉じたそのままで、ひらりと裏返す、とか。

又は、袋に入れた猫が、袋の口を縛られたまま、内側と外側とをひっくり返して外へ出る、みたいな。袋の外に絵柄があれば、袋を閉じたまま、絵柄を内側にできるようなイメージかな」

僕は額に手を当てる。眩暈を覚え、頭が痛いような気がしたのだ。

「何だか、わかりそうで、上手く言えない。でも、なぜ。焦燥するようなことではない。別に、どうでもいいことのはず。もどかしい感じですよ」

脳裡を魔法のスペルが廻り、金胎両部の曼荼羅が華やぎ、Joujouka (ジャジュカ。モロッコにあるスリフ族の村に伝承される音楽で、スーフィーを起源とし、ここを浄化する「バラカ」を内包するとされる神聖な音楽。なお、スーフィーとはイスラムの原理に従い、神以外を放棄して清貧・禁欲・苦行の実践により神と一体化を体感し、魂を浄化する神秘主義者。開祖がスーフ (羊毛) 製の白く粗い質素な長衣を着ていたことに由来する) の音が響鳴する。万華鏡のような動きをしていた。

対照的に、普簫くんは愉しそうですらある。

「これが五次元や六次元、七次元八次元ともなると、もっとややこしい。運動の自由度は想像を絶する」

「いや、もう四次元で十分に絶しています」

「量子力学的には、十次元の空間と一次元の時間とで十次元時空ということになっているらしいが、我々は百次元空間や一兆次元空間など、無際限に次元の数があると考えてい

る。実数・虚数など一切を含む無限複素数次元の空間、無際限無極限自由、一部のみの網羅も、非全網羅すらも含む全網羅、そういうものには、かたがない。それが絶空だ。いずれにせよ、路傍の石さ」

「それも勘ですか」

「いや、自明な、証明不要の理さ。かたがないからね。」

ただ、意識が制御して世界を分別している。意識と言っても、普通に考えるような意識というものではない。

世界が意識だ。それは「客観世界」というものは幻影で、世界が意識によって構築され、捏造されている」という意味ではない。逆だ。客観世界が意識なのだ。主観意識はなく、客観世界のみがある。「客観世界」がね。それが僕らの意識なのだ」

「真弓くんから何度か聞きましたが、その高説がよくわかりません」

「僕らの脳裡は脳裡のうちになく、客観世界じたいだ。それじたいだから、むろん、全網羅、全合致、全不異だ。なぜなら、強いて言えば、自由・零・空（＝非空・絶空・超絶に超越的な超自由）がゆえに、つてことさ。さつきも言ったがね。そんなことがあつて悪いという定義がない。自在奔放狂裂さ。」

だから、この世界は無数次元の世界なのさ。無数次元の世界の自由度は無際限だ。途轍もない狂裂さだ。狂裂だから、無数次元数の世界だ。

僕らの三次元世界は三次元世界で留まる意識で、三次元世界が三次元世界しか見せないから、僕らは三次元世界しか普段は見ない。そういう考え方さ」

「あなた方の言う意識は普通の意味での意識ではない。そこはわかっているつもりです。でも、まだ腑に落ちていない」

「意識は現実だ。外部の客観的実在」さ。

無限複素数の次元がある。自由度は無際限だ。ありとしあらゆる動き、ありとしあらゆる在り方が可能だ。かたがない。意識がそれを采配する。二次元、四次元、五十次元、八千億次元へとね。そして、そのそれぞれのうちで、現在・過去・未来に區劃される。區劃されなければ、區劃されない。ただ、それ丈だ。何せ、全てはかたちなく、かたちないというかたちもないから。だから、全ては（だから、同時ではない）「同時」に存在すると言える。よって、誰もが既に未来を見ている。そうでなければ、予知など可能はずがない。

面倒臭い言い方になるが、全ての次元の世界に於いて、その世界の過去・現在・未来が

“並列” “混在” “しながら” “同時” “異時” “に” “一体” “別々” “で” “同じ” “異なり” “在る”。要するに全網羅の原理さ。

ありとしあらゆるもの（又は時と場所が）もまた、さようにある」

「もし、そうであるならば、予知夢が実際にあるということも、全く不思議ではないということになりますね」

「どうかな？ 予知夢には他の要因も考えられる。そもそも、あらゆる想念は漠然とした感覚を構築した捏造物だ。解釈だ。ある不特定の漫然たる想念が後に実際の経験と結びつけられ、あたかも、その経験を以前にも観たことがあるかのようなきぶんになる。ふ。ありそうなことだ。

いずれにせよ、真の真においては誰もが現在過去未来も含め、一切森羅万象を知っている。沈む船からネズミは逃げる。誰にも教わらなくとも、生まれたばかりの仔犬は母の乳に縋りつく。鳥は巣を構築できる。向日葵は太陽の方へ向く。だから、アカシック・レコード（虚空蔵）もある。人も獣も草木も菌類も有機物も無機物もそれ以外も含めた森羅万象は皆、本当は全てを知っている。

僕らは皆、アカシック・レコードのなかを生きている」

「凄過ぎて、思考が追尾できません」

「まだまださ。もっと狂裂に。イタルのように、ね。

そうさ、まだ、こんなもんじゃない。それ丈のことじゃない。

次元の数が異なる異世界文が異世界の全てではない。そもそも、軸の数など関係ない異世界もある。時間や空間を座標では表現できない、いや、時間とか空間ではない世界という世界とその住人たちがいる。そのことはもっと理解し難い。まるで、異質、根底から異なる概念、概念などに成りようもないは世界だ。世界とは言えないかもしれぬ。

自由自在、自在無礙、無際限自由、絶空、自在狂奔裂なのさ、何の理由もいらない、何があってもおかしくない。じゃなくちゃ、物理法則生誕以前であつた宇宙開闢が起こるはずもない」

確かに、空間や時間がない時代に、物理的な法則があるはずがない。時間がなければ、宇宙開闢の時点を特定できるはずもない。それは、すなわち、今でも、明日でも、よい、ということになる。あゝ、何と言う自由か。何と自由なことか。もしもそうなら、本当にそうであるならば。

元来、一切は自由であることが本質で在るとするならば、見たこともない、見ることも

できない、かたちのない、異次元的な、いや、それ以上に全く異質な認識でしか捉えられない存在者たちがいたとしても、それは道理であった。

だから、唐突に存在があっても、おかしくはない。

もう、この問題は未遂不収のまま、放置した方がよさそうだ。皆、日々現実を生活している。焦燥する僕の思惟の狂った狂言妄言戯言につき合う暇はない。皆、日々の生活に忙しい。腹の足しにもならぬ与太話につき合う暇はない。

あゝ、そうだ。虚しいことだ。虚論だ、戯論だ。生活に還れ、事象へ還れ。

真分くんがふつと応えた。普蕭くんに比べると、彼はいつも飄々として端的だ。

「別に、それも悪くない。そういうことさ。在ったことが現実だ。存し^{あり}ことが真実さ」

そうか。この現実、今生きる実存。定義のない（という定義もない）このまま、未遂不収。

ただ、理由もなく、現実であるのみ。現実丈。唐突に、朴訥に、在る。不可思議もなく、曖昧もない。全てはつきりしていて、不明解な点はない。途方もない自由であった。路傍の道祖神が草叢に在った。それが釈迦牟尼如来だ。なぜなら、釈迦は鍛冶工の子チュンダの料理を食べた後、食中毒とも言われるが、血痢などの症状のある病に罹った。苦痛を堪え、旅を続ける。クシナーラーへ着き、「疲れた」と言った。沙羅双樹の間に横たわる。「喉が渇いた水が飲みたい」と求めた。かくして、竟に偉大な聖者、釈迦牟尼如来は亡くなられる。古いさらばえ、棄れた老人の亡骸となって果てた。清み明^{すみあ}けき崇高の美を帯びている。喩えようもなく、燦々たる黄金のオーラを霧のごとくに漂わせていた。それは又、一人の老人の死であった。

秋は深まり、鮮やかな黄や赤や紅や橙の錦繡も色褪せ乾きかさかさに枯れ散って終わり、寒気が来た。初雪を見た十一月の下旬も疾く、師走の賑々しき華やぎを含む忙しさのなか、凜冽な空気にまた、どこか焚火の懐かしさを覚える匂い。十一月二十八日、僕は再び寺に逝き、出家を願い出たが、許されなかった。

「では、在家の信者として、坐禅の場所をお貸しいただくことはできないでしょうか」

到底、承認され得ない無理なことと思っていたが、願いは意外にも許され、僕は釈迦が解脱したという十二月八日を期限と定め、堂に籠った。食事は僕より若い僧が一日に一度運んでくれることとなった。かつて、ともに修行していたことがある。彼の名は澄鏡であ

った。

僕は敷地の隅にある廃れた堂に籠り、仏像のない壇に向かい、只管ひたすら、坐禅する。もともと、壁に向かって坐し、修行した身である。本尊がないことなど苦ではない。

ここを虚しくする。決して努めない。ただ、呼吸を整え、息をより深く、より長く、さらに静かにして逝く。次第次第に。煩惱がおのずと湧く。

それはさまざまにあらわれては諸行無常と言うがごとく遷移し、やがて消えるも、時には長く反芻された。

問いが脳裡に繰り返し生じた。全ては生死のことと心得る。いずれ死ぬという時間性がここを急かす。貪欲に求めさせる。その欣求のとおりにならねば瞋いかり、殺戮も厭わぬ。生存とは虚しきことに執著し、死への虞おそれ、死なぬことを希う。それは癡おろかさであるが、自然が与えたものでもある。だが、それもそう観ぜられる丈であって、しみじみ想ふと、東洋的な曖昧さのなかにあり、根拠は明らかではない。

死を義しいとすべきか、死が生に喝を入れると知るべきか。死を生であると観じ、生を死であると睿らかにすべきであるか。

脈絡もなく、想いは果てない。勝手に動く。放置するしかない。

なぜなら、その解答を知っても、覚悟がなければ空疎だ。言語を超えた体験を求む。イタルのように超絶狂裂に。ところが僕に求めても、僕は「え応えず待りつ」。

骨から湧き、筋繊維に籠り盛り上がり、血を熱し、細胞に含まれて実存する解答でないならば、それは答えたことにならない。魂に実在しなければ。

金剛界曼陀羅と胎藏界曼陀羅とが浮かぶ。理を超えてこれらを体得しよう。まずはそれを突破口にしよう。鬱勃と、そのような動機が湧き上がった。このどのどこから。それが誰の意思かはわからなかった。僕ではない。この想いは魔界の境か？ わからない。わかり方が見出せない。

自由、解脱、超越、彼方へ、遙か彼方へ、絶空へ。生存を超越したい。

生存。それは時間によって、炙り出されている。時間とは、いつかは終わりがあ、いつかは喪われる、いつかは無くなる、いつかは滅ぶ、いつかは死ぬという、無意識的な焦りだ。焦燥が物事を意識させる。氣遣わせる。意識するから、氣遣うから存在として、かたちが炙り出される。明晰に網膜を刺す。

生存への意志、生きようとする意欲、生きたいという盲目的な意志、生き残りたいという我武者羅な欲望。当事者である僕らにとって、そこには実存がある丈で、理由も説明も

解釈も根拠も意義もない。ただ、そうしたい。溺れる者が無我夢中で、必死に足掻き藻掻くように。死にたくない。その恐怖と渴望との起源は生存だ。

廃れた堂に籠って七日。娑婆に出ずれば、雪が白く全てを覆い尽くし、全く別世界となっていた。境地は何も得られていない。挫折も虚しさもない。

「そんなにうまく逝くものか。それは瀝青のようなものだ。生存は僕らよりも深く強く僕らそのものだ。僕らより遙かに根源的な僕だ。引き剥がせようはずもない」

僕は新たに決意し、諸々の準備をし、知識を蓄え、行法を研究し、計画を練って、万事整った一月の終わり頃、寺に再々度赴き、もつと長期の堂籠りを願い出た。幾度も断られたが、幾度も懇願して拝み倒し、漸く許可を得た。

再び廃堂に籠り、灯明もなく昏い、埃っぽいなか、経を誦し、坐禅三昧、食事を運ぶ者がいないため、炒った種などを保存して食べ、ペットボトルで水を摂取した。乾燥していたため、乾きものの保存には適していた。やがて、闇に慣れ、経文も読めるようになっていく。外に出るのは、屋外の厕所へ入る時丈であった。ときどき、様子を見に来る者がいるらしいことが気配でわかる。感覚は鋭敏になっていった。眞神に逝かなくとも、齊會議に出られそうな気がする。だが、もつと、ゆっくり様子を看よう。寂寞に。

齊會議に出席できたことは、よい経験であった。

こうした感覚への刺激が少ない、禁欲節制の果て、死にも近い生活のなかで、生存が最後の生き残りを賭けて猛襲する時、打ち敗れることも、狂気に陥ることもなく、じつと堪えて遣り過ごせるのは、あの経験があればこそであった。

繰り返して過ごす。日々は、ただ、過った。疾風怒濤、波瀾万丈の海のように、死の沙漠のように。日々は。過る。諸行は遷流して逝った。諸法は行（遷流）にしかず、実体がないもののように観ぜられた。そう想えば、関心を持たず、さらさらと眺められる。存在は生存への意志に拠る。全ての論理思考も、その派生でしかない。生き残るために、現実を分析し、法則を見出し、未来を推測する。言語も諸概念も考概も、同様に派生でしかない。一切のかたちもそこから生まれた。全てが、だ。

『大毘盧遮那成三菩提神変加持（佛所護念）經』、いわゆる『大日經』に於いて、悟り（菩提）とはここである云う。ここはおのれのうちになく、外になく、無分別でなく、妄念妄想ではない。ここは色界（生存世界）になく、無色界（非物質界）にない。ここは空であるという。おのれのことを知れば、菩提（さとり）を知ると云う。それは萬物萬象萬世萬界の実相に参入することである。それらを網羅し、それと異ならず、それそのものであ

ることである。萬物萬象萬世萬界に齊しく、かつ、かたちないということ。そうではないこともまた可也。

空は空をすらも絶つ。

それあたかも、非が非をすらも否むがごとし。かたちなき哉。空は非空（有）であるがゆえ、萬物萬象萬世萬界はかく在る。こころは虚空である。こころは世界一切の真実である。

それ空とは、かたちなきゆえ、とてもかくても候。こころが萬物萬象萬世萬界であつても候、虚空であつても候、世界一切の真実であつても候。そうであつても疑義はなく、証を要さず、僕らは安堵する。

非は是非にて、全肯定である。全肯定は一切と異ならず、全てを遺漏なく、網羅する。全てを網羅するとは、いかなや。甚深微妙である。全てを網羅すれば、全てを網羅しないことを遺漏する。一部しか網羅しないことを遺漏する。それらを網羅せねば全網羅全肯定全不異とは謂わず。しかし、それらをも網羅するとても、全てを網羅しないことのみであることを網羅せず、一部を網羅することのみであることを網羅せず、全網羅とは謂わず。これを網羅するとき、それ狂裂ととふ。

これ、おのれがこころなり。こころを知れ。かくして超絶超越の絶空に至らんや。自在無礙に至らんや。全く別世界、異界なる天界へ至らんや。

恐らくは、自在無礙を得たときに惟ふであろう。執著が、存在が、かたちが重荷であつたと、苦しみの轍を刻むことであつたと。釈迦が貪瞋癡を解体せよと言つた意味がわかる。貪りも、瞋りも、癡かさも、全て生存に由来する。

貪りは、より確かに生きるようと、際限なく、余剰に貪る。自己肯定を強化するために、あらゆる贅澤を貪る。そこに陶醉を覚える。

自己の尊厳が貶められれば瞋る。威嚇してでも、尊厳を守ろうとする。自己の尊厳が損なわれることは、野生にあつては死を意味する。愛する者を瑕つけられれば瞋る。家族は種の存続という、生存への意志の大きな根幹だ。権利を奪われれば瞋る。権利を奪われれば、生きる手段を奪われる。それもこれも無明なる生存への意志のなすがままにされていることである。

仏教ではそれを癡かさであるという。昏沌として闇雲なる生存への意志の怒濤に翻弄されていることを癡かさだという。

そう想えば、貪瞋癡を解体すれば、生存を超越する道筋が見える可能性があるだろう。解脱

への道が。自由への道を見出せるであろう。狂裂なる自由へ逝く道を。

生存の超越は死か？ 死を意味するのか。そうだ。むろん、死だ。

無余依涅槃は完全なる死だ。だが、生命でもある。生命は生存ではない。正義のために死することは生命だ。自己を超越することは崇高であり、生命そのものだ。自己を狂裂する自己超越は生命である。彝之イタルは生命であった。生死の分別を超え、炸裂したからだ。生命の大義は超越である。

現象的ではあるが、鑑みれば、全生命は自己を超越して進化してきた。自己の限界を超えて進化してきた。それが生命の意志か？ わからない。わかる必要もない。現象に囚われるな。

寂滅して樂を為せ。静かに。しずかに。そう、平常道は為そうと想っては為せぬ。無為自然にせよ。時の経つのを忘れていた。平安のうちにいる。きよらかな平安のうちに。

それは風の湖面のようであった。明鏡のごとくである。知ではないかたちの“知”によって、それを知っていた。

ふと一刹那、向こう岸へ渡ったように感じる。あちらへ。彼の岸へ。

あゝ、凄まじい解放、かたちということがどれほど重みであったか、束縛であったか、壓であったか、存在がどれほど苦しみであったかを知る。苦というものを初めて知る。苦を知ることが仏教の基本であるが、僕らがいかに苦ということを知っていなかったかを、まざまざと悟った。

あゝ、もう死んでも善い。成すべきことは成された。

蒼穹よ、あゝ、自由なる蒼穹よ。無限をすらも超えて、きよく澄み切り、いずこまでもさやかにひろやか。全く重さがない、かるやかさ。寂莫、全く負荷がない。平穏にて静寂なる快さ。完全過ぎるほどの完全。

入滅しようと思ったが、堂の扉を開けようかという考えが頭を過った。そう想った瞬間、霧散した。燦然なる喪失感のなかにいた。惜しくもなく、残念でもない。

「ふ。そんなにうまく逝くものか」

同じ言葉を独り言つじぶん。鼻尖で笑う笑いが真分くんみたいだなと思った。

まあ、いいか。出よう。そう思った。

出たいからではないような気がした。やめたいからでもない。とは言え、そうではないかもしれない。どっちでもいい。深くは追究しない。ただ、季節が変わるように、移り変わり、そう想った丈であった。

立ち上がった。ふらつく。縋りながら、扉を開けた。

桜華。

もはや、散るしかない満開爛漫の春であった。桜華の死は生命の横溢、爛熟であり、美しい。死が生命の精華であった。

『死を生と齊しく觀じ、生を死とぞ睿らめる哉』

そんな言葉が突如、脳裡に閃く。恍惚とした。何と美しい言葉か。どこかに出典がないか考え抜いたが、何も思い出せなかった。言葉と言うよりは舊字体を遣った字面として泛かんだ。美しい文字だ。出典を探したり、意味や根拠や意義を追ったりすることはやめた。ここに直截得られた觀があまりに美し過ぎたからである。醒めた陶酔があった。燦然たる神の崇高の光を浴びたかのように感ずる。

薫風は芳しく何と爽やかなことか。久々に吸う新鮮な空気であった。何も変わってはいない。

顔を洗い、髭を剃り、鏡に映る、青白く衰えたじぶんの顔を、沁みぐと見た。衣を整えて、寺への挨拶を済ませ、辞す。帰り掛けに、苔や石垣や伽藍や大樹などを眺めて、暫時、茫然とする。存在は何とアバンギャルドなのか。僕は既に決意していた。特に深い考えなどではなかった。

草葉あきらは生活を求め、眞神に定住する。そう決めた。

時間を見つけて数日、逍遙し、涉獵した。美しい東北の自然。ただ、残念なことは縄文人が見た景色はこれとはだいぶ違うものであったであろうことだ。植生もかなり違っていたはずであった。時や歴史とは不思議なものだ。

瀧や溪流を眺め、こういう場所が好ましいが、普通の生活はできない。こんな景勝でする修行のような日々、苦行者に近い生活が僕には佳いと感じられるが、飽くまで普通の生活を試みたかった。

「あゝ、これは」

僕は湖を見渡す。

龜鹽村に龜鹽という湖があり、その畔に使われなくなった農家の納屋があつて、電気もガスも水道もないが、僕は住み始めた。家賃はない。納屋の持ち主である老夫婦の農作業を少し手伝い、少しの野菜と米とをもらつて暮らした。ときどき、棄てた芥なども拾い集める（こころない旅人であろうと考えられる。近くに住む住民は湖水を使用しているし、少し離れた所に住む人々も龜鹽を神聖視している）。飲み水は井戸、若しくは湧水であつ

た。残飯も油もない食器洗いは龜鹽の水を鹽に汲んで済ます。終わったら、土に撒いた。顔を洗うも口を漱ぐも井戸か、湧水か、龜鹽の水だ。洗濯洗剤を使わずに手製の洗濯板で衣服を洗った。

時々お婆さんとお爺さんがお布施と言って、蠟燭や香をくれた。僕が読経する姿を見たからであろう。僕は僧ではないからと辞したが、布施は布施する者の功德になるので言っただけでなかった。僕は有り難く頂戴した。お布施は手拭いや石鹸などであることもあった。彼らが供養と想うなら、供養にもなり、僕もまた供養される対象と言わなければならない。沙門は僧籍にある必要も、寺に属する必要も、ましてや宗教法人に認定された団体の一員である必要もない。

釈迦の時代、沙門は世俗を離れ、修行する自由思想家であった。思えば、莊子の説いた“真人”も大きく世俗の価値観を超越した人ではなかったか。それが人類のファイナル・アンサーなのか。

僕には決められない。むろんだ。ただ、生きる上での選択はしなければ生きていけない。正解はない。人は皆、窮極に於いては、独りで死の淵へ陥って逝く。人は皆、本当は独りなのだ。それぞれじぶんで決めなくてはならない。独りで生き、独りで死す。そう、まさしく人は独り死す。死の淵に陥るそのさなかには、たとえ、看取る者たちがいても、陥るそのなかへは家族すらも立ち入れない。独りで陥って逝く。

老爺や老婆の素朴な笑顔は、束の間、それを忘れさせてくれた。人とは、有り難いものだ。人は人と繋がって安心しようとする。素朴で誠実な人は安心だ。心底が読める。結局、そんな功利的な理由で、素朴な人々は好まれてきたのだ。その何が悪い？ そんなひねた考えなど持たぬが良いのだ。この老爺や老婆も、彼らの父母や祖父母や曾祖父母が教えてくれたことを、そのまま信じ続けて何百年も生きて来た人たちのうちの一人である。釈迦の教えにも適う人たち。古くから人類の間に培われてきた社会倫理にも適う人たち。すなわち、仏教に言う、不殺生・不偷盗・不邪淫などを守ってきた人たちだ。

人間の価値観や信条をそのまま信じて来た。だが、僕らや釈迦たちは必ずしもそうではない。一度は全てを疑い、全ての束縛を超越し、絶空の上で、甚深に瞑想した。どちらかが正しいのでもなく、間違っているのでもない。

そんな差異は理窟でしかない。表層的なことではない。どちらも現実であって、現実でしかなく、今生きている現場、まっただなか、現実であることに相違はない。僕らの実存であることに間違いない。

切実であれば、それは在るのであり、ただ、それをどう生きるかの問題であり、いずれは死して逝く時が来るので、その時に何を想うかを試みに空想して、参考のうちの一つにすることは必ずしも無為にならない。魂の声に聴従し、今というこの瞬間を、真摯に見据えて。僕はそう思う。それ丈だ。そうやって生きる。生きて逝く。

そんな日々、お爺さんが木製の歯ブラシをくれたことがあった。僕はアーユル・ヴェーダで神聖なる薬木とされるニームを十数本植えて、毎朝、枝を折って先端を噛んでほぐし、歯ブラシにしていたので、用は足りていますと伝える。歯磨は大事だ。

蒙を啓く釈迦は弟子たちに伝承の呪文の数々を禁じたが、歯痛を癒す呪文は赦したという。真偽は定かではない。僕がどう考えるかだ。

独りでさまざま考える。天の月と、湖面の月とを飽かず眺めて逍遙した。そのうちに明けの明星が一際輝く。六月上旬までは明けの明星が見られる年であった。黎明を感じ、しばし休もうと想う。しゃがむと、こんなに素晴らしい大自然の素朴のなかに、誰が棄てたのであるうか、ブリキ製の空き缶が転がっていた。

ラベルには、『鯉』とある。賞味期限は二〇二八・二・二八。

缶截りの刃によって、ZAKZAKと截り裂き牽き剥がされた蓋面ふちの、ZUDAZUDAにあざやかな截り口がぎらぎら捲れ上って、あたかも、頸を刎られ、顛さ磔にされた骸のよう、叛き仰け反り逸れ販りたる芽剥ぎのさま。

からっぽ。

子と存。

存在が炸裂であった。在という狂裂。静止であるほど激烈な爆破裂。空をすらも絶する狂った自在無礙、自由奔裂をも牽き裂く自由狂奔裂。